

The Kansai University Bulletin

Osaka, October 15th, 1926—No. 43

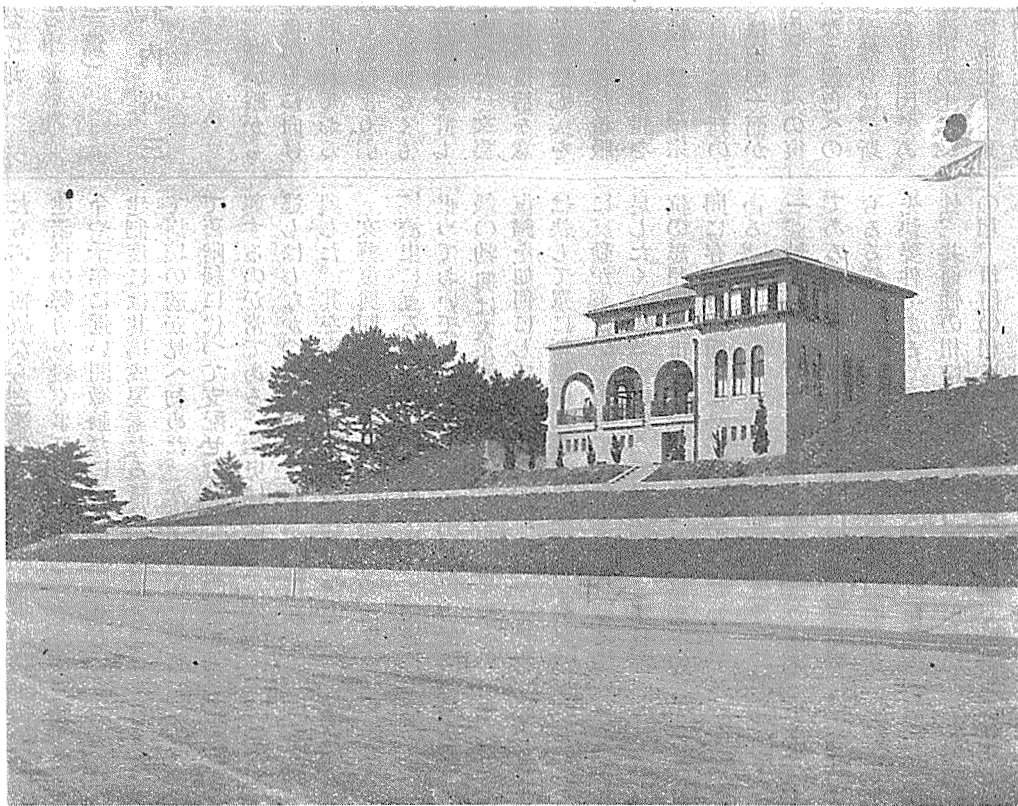
子 里 山 學 報

行發日五十月十

號三十四第

年五十正大

Students' Club just completed.



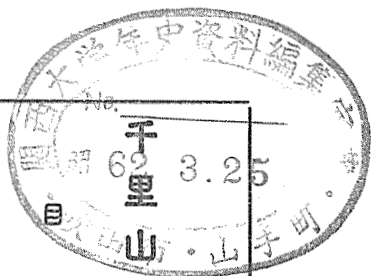
スウハ・ブラク學本るせ成竣

阪 大

堀佐土話電
番〇七五五・九四〇一

局報學學大西關

座口金貯替振
番五七八二一阪大



千里山學報 第四十三號

次

- 挿繪——竣成せる本學クラブ・ハウス(表紙)——
- 二商業學校卒業旅行記念攝影——大村吳樓氏——柏原好郎氏——千里山山岳部員のキヤムピング——福島辯論部第一回部員總會記念攝影——鳴門權斷のレコードを創つた三木選手——京城驛頭に於ける千里山野球部チーム——オイケン教授の筆蹟
- 哲學概念の歴史的發展
- 關西大學教授 武内 省三
- 京都皇宮沿革略 關西大學講師 新町 徳之
- 學内報——松本學長伯父目賀田男の逝去——本學教職員團の觀月會——大學祭——制定——武内教授實業同志會市民講座部雄辯講座講師を委嘱せらる——本學專任教授講師著書一覽表——關西大學第二商業學校彙報——關西甲種商業學校彙報
- 校友の面影——大村吳樓氏——柏原好郎氏
- 校友彙報
- 學生彙報
- 歐米の學界
- 千里山俳壇
- 千里山歌壇

哲學概念の歴史的發展(續)

(特に現代の哲學概念の地位及意義を明にする事を主たる目的とする一篇)

關西大學教授 武内 省三

五

歐洲人が中世の昏りたる永い、深い眠から醒めて清新なる曙光を再び此現世の上に向けられた時代は文藝復興期の名を以て呼ばれておる然して哲學をば宗教の奴隸たりし地位より引上げて其本來の地位に迄引戻し意氣地なくも萎縮し切つた思惟に再び活潑なる活動を許した者は實に此時代の思想家達であつた。文藝復興とは其名の示す如く希臘文化の復活を意味する。其は皆て無邪氣にも自然を愛し美を讚へ智性を重んじ肉と靈の融合を信じた希臘の思想に復歸するに過ぎなかつた。永い中世を通じて續けられた肉の壓迫と智性の禁止、宗教の重壓に堪えかねた人々が、自由と清新の昔へ里歸りする事であつた。そは他の一面から見れば hierarchy から democracy への復歸であり、暗い灰色から朗らかなる藍色への轉じてあるとも見られ得る。何が然らば、斯る著しき思想上の一大變改を齎らす原因であつたらふか。我は政治史及經濟史の上に數多くの原因を數へ得る。即ち十字軍による東方諸國の文明との接觸、新航路新大陸の發見、東ローマ帝國の没落、印刷術、火藥、羅針盤等の發明等、其重なる物である。然しながら就中有力なる原因は永年に互る十字軍の遠征が少からず封建諸侯の財政状態を困窮せしめた事、又火藥の發明が在來の兵學戰術に一大變革を齎らざるを得なかつた事等であつたらふ。何故なら之等の原因は悉く從來の封建諸侯の勢力を殺ぐ事に役立つたからである今や千年に近い間微動だにする事なかりし封建制度には其構成要素たる諸侯の衰運と連れて崩壞の萌が見へ初めた。かかる氣運に乘じて舊階級に代つて支配せむとする新階級が勃興するのが常である。歴史は其機會を空しく逃しはしなかつた。かくて新に市民階級が勃興した。其を表徴する物は自由都市である。文藝復興期の社會現象を記載する政治史や經濟史に互る部分は以上の如く極めて簡單に止めておいて、然らば封建制度の崩壞、市民階級の勃興は人生觀の變化特に希臘思想への復歸を如何にして招來したであらふか。我は決して單に新氣運に乗じて俄に舊來の思想に反動が來たのであるとふ簡單な片付けに満足したくない。更に進んで封建制度と宗教本位の思想、及市民階級とギリシヤ的思想との間に存する内面的な必然性を見出したのである。

一、封建制度の社會は主從の服從關係の社會である。服從關係が嚴重に或は圓滑に運用せらるる爲めには自己卑下と長者尊敬の心理が先決要件である。此る心理は人間相互を普遍性、共通性の相に於て見るのではなくて差別の相、價値の相に於て考察する時初めて可能なる。科學の精神の元にあつては一切に通じて其の持つ普遍性共通性を探し求むるのを其目的とするが故に彼を我をば共に同じ生理的構造を具へ生物的條件に支配せらるる者

として考察する。故に爰には價値的差別はなく從て英雄も凡人化せらるるのが常である。中世の精神はかかる科學的見地からは縁遠い物であつた。即ち彼を我をば價値的見地より眺め、善惡美醜尊卑の標準に照し合はして上下の階級をつけ彼は我より「秀でたる者」「美しき者」「善き者」「尊き者」等の差別をつけて見やうとした。此る階級に應じて夫れ夫れ應分の尊敬と權利と義務とが割宛てられて來るのである。實に服從の心理は斯る價値的見地の上に堅い基礎を持つた物であつた。科學の精神が democracy であるならば價値的見地及態度は hierarchy である。而してかかる hierarchy の精神が最も力強く具體的に現はるる物は宗教である。此所では價値的差別が絶對的の物として現はれ、上には完全全體としての神が坐し下には罪惡其物としての人類が蠢く。宗教が服從の倫理とかく内面的關係に立つ事實こそは實に宗教が封建制度の堅い地盤を支へた有力なる原因であつた。

二、宗教と封建制度とが密接に結びつけられる他の重要な原因は、死の恐怖と宗教との間に存する内面的關係であつた。封建時代の生活が常に戰爭を中心として營まれた事は彼等の宗教心を刺戟するに痛く力あつた。彼等は今日ありて明日知らぬ身である、死の影は絶え間なく彼の身邊に漂ふて一瞬の安き心を與へない。斯る恐怖の内に安心を求めむる努むるならば平和の時とは似もつかぬ或種の信仰を必要とする。其信仰とは彼岸の生活への憧憬であり現世の快樂の無常觀であらねばならぬ。もし現實の欣びと愛情とに執着すれば死は思ふだに悲しい極である。此の悲しみ

より逃れ、此の苦惱に屑く面接して耐え得る爲めには現實は無常であるさ冷く遠觀せずにはおられない。そして彼等の華しい死も其に依て酬ひらるる名聲と神の國の生活とが此世に於ける喜びにも遙に増して楽しい物であらうと豫想せらるるのでなければ欣然として屍を曠野に曝す事が出来ぬであらう。封建の生活は絶え間なく彼等に死の覺悟を強要した彼等は於て爰宗教に依てのみ慰められ宗教によつてのみ現實の美と欣みに眼を背ける事が出来た。彼等は現實の悲喜に心を動かさるる事を耻ぢる。故に悲しみに際しても涙一滴こぼさない。泣くは無常觀に徹底せざるが故である。又喜に際しても笑みを浮べない。笑ふは喜の背後に無常あるを忘るる者の端なき草であるからである。喜怒哀色に現はさず唯石の如く黙黙として死を迎ふる心構へを彼等は宗教の内に練つた。

宗教がかく封建制度と密接なる關係下に立つ以上封建制度の没落は同時に宗教の衰運を伴ふ事ではなければならない。然かも新興勢力たる市民階級の生活と宗教とは少くも上述の二點に於て著しく矛盾する物であつた。何となれば永年に亘る階級制度の崩壞の次には少くも unchristianic な制度が之に代るのを常とするからである。然かもかかる democratic な態度が科學の精神と一致し宗教が代表する價值的態度と著しく矛盾する以上、科學が榮え、宗教が衰ふるのは亦自然の勢と言はなければならぬ。然かも嘗て名門を誇り家柄に驕つた封建諸侯が頭を垂れて市民階級に降る時廣く市民等は如何に階級の特權の基礎をなした價值的差別の理由なき事を痛感したのであらう。

「諸侯と我との間に何の相違があらうぞ」と言ふ其意識はよく科學の精神と一致するものである。社會制度の democracy の要求は精神の democracy としての科學的精神を要求した。宗教の hierarchy は封建制度の hierarchy と共に衰ふるの外はなかつたのである。

更に市民階級の勃興は必然的に科學研究を隆盛ならしむる物であつた。何となれば此の兩者の間には必然的な關係が存在するからである。市民階級の生活は其本質上封建武士の生活と正反對であつて飽迄も現世の富と快樂とに執着する生活である。彼等日日の關心事は富を迫り物質を享樂する事にあつて死は少くも日常生活の埒外に立つ。彼等には死の覺悟の如き、又來世への欣求の如き餘りに實生活に縁なき事柄である。彼等の勵む可き事は此現實の生活を豊に潤ほし美しく裝飾せむが爲めに、富を掻き集める事にある。富を得む爲めには科學的研究に依る自然征服に俟つのが賢明なる方法である。中世に於ける宗教の壓迫の元にあつては教會の與ふる教義の外に自然の神秘を詮議するの自由は禁ぜられたが今や宗教の衰運に乗じて此新しき自然征服てふ大目的を抱いて人人は猛進せむとした。爰に理知の解放が叫ばれるに至つたのである而して社會の數多くの現象は如何に此の理知の自由解放の要求を熾烈ならしめるに役立つた事であつたらう。

斯る經緯を思想的背景となしつつ希臘化した歐洲思想は著しく科學的な物であつた。其の精神は傳統を厭ふて自由を愛し、差別を嫌つて平等を尙ぶ。又彼岸の國への思を棄ててあるが儘の自然に眼を轉じ、盲目なる信仰

に頼らずして理知を思ふが儘に驅使する事にあつた。自由平等の讚美と理性の禮讚とは此時代精神の中核をなした。哲學の復活はかかる新精神の内に育まれたのである。

自由平等の要求が科學的精神と相俟て勃興し來るや其要求の及ぶところ社會生活の諸方面に及んだが先づ其解放の第一歩は理知が信仰より解放せられた事即科學が宗教の壓迫より獨立した事であつた。科學は今や雀躍する欣に溢れながら飽くる事なく自然の觀察に耽つた。そして僧侶によつて信す可く強制された獨斷さは似もつかぬ新奇にして複雑な自然の構造に好奇の念を強めて行つたガリレオ、ケプラー、コペルニカス等の如き最も秀でたる天文學者の輩出を以て新時代の門出は先づ祝福されたのである。哲學は此時宗教より漸次離れて宇宙萬有の總體學、即自然の形而上學となつた。我我はブルーノに其代表者を見出す。十六世紀は實に此意味に於て「自然」發見の時代であつた。

六

然しながら中世にあつては真理と言へば教會の教義の謂であり教會の教義は天啓に基く超理性的眞理の謂に外ならなかつた。然るに今や教會より獨立して立ち理知を以て唯一の武器と頼む科學にまつては如何にして神秘の力を藉る事なくして確實なる眞理に到達するかの方法を嚴密に現定し又其獲得する眞理が如何なる性質の物なるかを明確に示す必要に迫られた。然して斯る要求の元に哲學をば今や自然の形而上學より更に自我の内省へ轉向せしめた二人の哲學者が現はれた。デカルト及ベーコンである。

新時代の創造者としてのデカルト及ベーコンは其性格に於て又其生活に於て著しい對比をなしておるが兩者を通じて根本的な相似は鋭い理論的良心の覺醒其物である。デカルトは概念的思辨と綿密なる數理的計算を以て自然探究の方法であり從て數學的思惟法をば一切の學に遍通して妥當なる方法たる可しとの唯理論を稱へた。ベーコンは反之感性的經驗を以て一切認識の根源をなす物であるとの立場から歸納論理を説き「知識は力なり」と標榜して智的活動の實生活に對する効果を力説したのである。然して此二人は一は唯理論の祖として他は經驗論の先驅として近代の哲學の二大潮流を形成した點に於て我々の記憶の内に永遠に深く刻まる可き人々である。然かも注意すべきは此二大哲學者が眞理に至る道を重要視し洞察の視光を深く理性活動其物の姿に投じた事であつて哲學の興味は次第に自然界の興味より自我の内面性へ轉じて行くのであつた。

自我の研究は第十八世紀に入るに及んで更に一層深まつた。ロックは一切の學的問題の最後の解決は知識が如何にして成立するかを明にして初めて可能なる事を明確に意識し認識論的研究を哲學の中心問題となした第一人者である。彼の經驗論哲學は更にバークレー、ヒュームに發展し、其發展の最絶頂に至つて終に懷疑論に陥らざるを得なかつた。然し其結論の如何に係らず十八世紀をして「自我」發見の時代たらしめた功績は没する事を得ない。自我の自覺は然しながら獨り哲學の内に於て温醸された物ではなく其に先て宗教改革あ

り、又政治的參政權の擴張等の歴史的大事變があつた。宗教改革は之を思想的に見れば宗教上に於ける自由平等の要求の現れに外ならぬ。其は從來信仰言へば法王の教條に全然束縛された物であつて此解釋以外一步一厘も變改する事が許されなかつた。其の權威は絶對視せられたのである。何となれば法王は一般民衆より遙に勝れたる智徳者であつて民衆と神との間に介在して神の意志を直接に聞き之を民衆に傳ふる者、従て法王の言は天啓に基く神の意志なるが故に絶對であると言ふのである。一般民衆は勿論神の御心を直接に感得する能力を持たぬ。故に法王の教、解釋を信ぜずして自己勝手に變改を加ふるが如きは神の御心に背く者でなければならぬ。斯くの如き論據の上に法王の絶對的權力は築かれておつた。然るに斯る壓制から信仰の自由を解放し、神の御心は何人の良心にも平等に開かるる所以を主張したのが宗教改革運動の真義である。神の前には如何なる人間も平等であり唯聖書により基督への信仰によつて神の國に入る事が出来る。教會僧侶の特權を奪ひ個人の良心の價値を力説した點に於て實に宗教上の個人主義であり文藝復興の精神の鮮かなる表現である。固より宗教改革を目して肉に耽溺した文藝復興期の生活倫理に對する反動であるとも見られ得る。然し少くも其思想的根底に於て個人の自覺、自由平等への憧憬が其槓桿であつた事實を見逃す事は出来ない。

最初自然に興味を抱いた人人の眼は宗教改革によつて個人の價値及其自由への意義へミ覺醒して行つたが、更に一層其自覺を深刻ならしめた物はルソーの自由民權の思想であつ

た。固より其内容は餘りに熟知せられておるが故に其説明を省略するが此ルソーの主張は佛蘭西大革命の動力となつて歐洲に於ける封建制度の遺物を根こそぎ轉覆させ終つた物である。然して此ルソーの思想、佛蘭西大革命の精神こそは實に文藝復興期に於て目醒ましくも振興した自由平等、個人主義の精神の自然的な延長たる事は疑ふ可くもない。かくて社會思想の一般的風潮は十八世紀に入るに及んで今や自然探究よりも、個人の價値に關する反省に其興味を焦點を向けて來た。社會思想と哲學思想とが如何に異なる問題より出發して同一點に歸着するかを。我は心して見守りたい。

自我の自覺を深酷ならしめた原因の一として我は先にロッキに初まりヒュームに終つた英國經驗哲學を數へたが經驗派の認識論は心理主義的方法を採用する點に於て許し難き矛盾を冒しておつた。其理由は既に先に述べたから爰に再び繰返す必要を見ないのであるが爰に心理主義的方法の缺點を指摘し新に論理主義的方法を樹て認識の價値批判を以て哲學の本質となす可く主張した者はカントである。價値批判の立場にあつては存在を當爲とは嚴然として峻別せられ、當爲、價値は全然存在より超越して普遍的に妥當する物、従て存在よりは決して導き出さるる物でない事が明にせられた。哲學の本質は斯く當爲の界を思索する事にあつて存在は些の手助けをも其爲に呈供する物でないとするならば爰に當爲探究の爲には存在或は現實は些も考察に値しない物となる。否哲學者の眼は唯當爲、價値の世界にのみ向けられる結果を來す。存在の

獨自の眞價は此に著しく減少し唯當爲たる眞善、美の影を宿す事によつてのみ眞善なり、美となり善なる。當爲の價値を宿さざる存在其物は誤謬であり惡であり醜なる。故に存在は當爲を實現して初めて其眞價を發揮する。存在の努む可き事は正に當爲の實現であつた。當爲は於實現せらる可き理想であり存在は當爲を宿す事に依て理想に近寄る事の出來る不完全其物である。然らば此當爲を見出し存在に具體化する働きは何であるか。其は理性である。かくの如くカントの稱導した批判哲學は存在を當爲の二元論の上に立つて著しく理想主義的傾向に進んで行つたのであるが、此理想の實現を約束する能力として理性の偉大なる力を信じた十八世紀の人人には爰に熱心なる理性への讃仰が初められたのであつた。見られよ。十八世紀の人人が如何に理性を禮讃したか。カントの二大批判書の表題が「理性」の批判と名づけられたのは其一例と見られ得る。更に當時の教育學の根本思想の内には此る理性への絶對的信頼の念が宿りはしなかつたか。啓蒙思想によれば理性は元來人性の内に宿る物なるが故に之を適當に教育し開發さへすれば理性本來の光は輝き出て人間は神性に近づくことへ考へられた。かのゴッドウインの如きが性慾すら理性に依て制御し得らる可きことへ考へたではないか。

十八世紀の若しい理想主義は哲學理論としてカントの批判哲學に代表せらるるが、然し其勃興には少くも實生活上の共鳴がない譯ではない。其は佛蘭西大革命の勃發を前にした健全なる社會状態と、第一第二階級を深く憎惡する民衆一般の素晴らしい意氣込みとで

ある。現實の社會制度は不完全であり理性の示す理想社會の姿は完全である。存在が價値を宿す事に依て初めて存在の意義を得ること均しく、此封建制度の遺物を完全に社會から掃倒し去り、代るに理性の社會を建設する事が彼等の現實生活の意義である。然して其大使命を完全に果す爲めには感性は理性の命令に従はねばならぬ。彼等は批判哲學の精神を其儘移して帝王や僧侶貴族の壇なる所業や惡制度に對する憎惡の念を理論化し深く志を堅ふしたのである。

理性の理想主義には然しながら恐る可き陥穽が氣づかれずに潜んでおつた。其は批判哲學が價値を探究するに當て存在を全然無視したと同様に十八世紀の理想主義は理想社會の姿をば専ら理性の案出に委せ切つて現實を些も顧慮しなかつた事である。現實に根ざす事なくして現實より數千歩遙か彼方の理想社會に現實は無限の罅隙を飛躍しつ一朝にして到達する事が出來やうか。彼等は出來ることへたのである。何故に。曰く我の感性は柔順に實際理性の命令の下に制御し得らるること考へたが故である。彼等には理性が絶大の力として映じた。理性の過信こそは後になつて氣付かれた躓きの石であつたのである。彼等には人間精神の奥に蠢めく不合理なる意志の強力、其が理想への飛躍を阻む意地惡さに氣付かなかつた。彼等には理想に奔つて現實を無視した。彼等は未だ進化の思想が醗酵されては居らなかつたのである。

斯る情勢を再び哲學概念に關聯して考察するに經驗派の哲學は一種の自我の形而上學として自我の意識を強めたが其に存在する缺點

の爲めにカントの批判哲學に克服せられた。カントの批判哲學が論理主義の立場から價值當爲の探究に向つた事は現實を無視する價值哲學となつた。然して斯る哲學理論と相對應して社會思想は現實と無連絡なる理想社會を望見するに至つた。然して價值、理想は理性によつてのみ發見せられ實現せらるるべき理性の缺點を兩者は共通に持つたのである。十八世紀の中頃迄を自我發見と名づくるならば十八世紀後半は「理性」發見の時代とも言はれ得る。

七

十九世紀は哲學界に於ては批判哲學より形而上學に移り進化的思想と科學を發達させた點に於て十八世紀と著しい對比を示してゐる。理想より再び現實に眼を轉じたのが此時代の特徴であつた。之を哲學に見るにカントを繼いだフイヒテはカントの意識一般の概念を形而上化して自我と行事を其本質と見做す様になつてから哲學はカントに於ける嚴密なる批判哲學の領域から脱出して再び形而上學に舞戻つた。フイヒテに次いだシェリング、ヘーゲル、ショーペンハウエルに至つて益形而上學に深入して來たのである。然して此形而上學は實に理想の飛躍的實現に失敗した時代精神が若若しい空想的理想主義から醒めて、現實を諦觀し現實の底より理想を汲み出さむとする質實なる時代傾向に一致する物である。然らば如何なる原因が働いてかくも旺盛なりし理想への思慕が、地味な現實主義に鞍替へせねばならなかつたであらうか。其最も重大なる原因は佛蘭西革命の失敗であつた。

佛蘭西革命の失敗は抑も何を訓へたか。曰く理性の無力と理想の空しさである。嘗ては輝かしい未來を空想して革命の鼓に胸おこらせ貴い血潮を卷に流す事を欣んだ人人も此高價な犠牲が何を購ひ得たであらうかを靜に思ひ廻らす時餘りに慘酷なる幻滅の悲哀に胸を昏らせざるを得なかつたのである。革命は唯第三階級を潤はして第四階級は其分前に與り得なんだ。加ふるに勝に乘じた第三階級は資本主義を益發展させ第四階級の生活には日に物質上の脅威が加へられる。帝國主義は資本主義の發達と相俟て益暴威を振ひ國際間に紛亂の種子を播いて行く。武力がかくして醸された争闘に解決を與へて行くのが常例であつた。之が彼等の理想への努力から孵化された結果であらふことは想像だになし能はぬ所であつたらふ。理想とは美しい空言でなく何であるか。彼等はかく理想に裏切られて暗澹たる悲哀に心を傷めざるを得なかつたのである。悲觀、絶望の思が十九世紀を蓋ふたのも無理ではなかつた。

更に彼等は又理性の過信より其絶望へも蹴落されざるを得なかつた。何となれば彼等は理性こそは一切の感性を退け慾情を抑ふる絶大の力なるが故に其理性の命令こそはよく理想社會の實現を可能ならしむる物と信じて疑はなかつた。歴史の課程を文化の零より百に引上げる其飛躍は各個人が理性の命に絶對服従し得る能力を具ふる以上、其能力に頼る以上試みて不可能な事はよもあるまじく彼等は考へられたのである。然るに事實は此信念と一致したか、否。革命期數十年に亘て混亂に次ぐに混亂を以てした歴史は理性が如塵に

力脆い物であり其反對に貪慾や執權なる權勢慾が盲目なる衝動力として理性を壓迫し、縦横無人の横暴の限を働かかを如何によく示した事であつたらふ。否時には慾求が擅に理性をば自己粉飾の道具として驅使した事實にさへ面接したのである。理性への絶望が爰に初まつた。人生を支配する法則は理性ではなく其は盲目なる意志である事に氣づいたのである。生活苦、階級間及國家間の絶間なき争闘、理想の裏切り、理性への絶望等、此等が佛蘭西革命の教訓として人心の底深く刻みつけられた物であつた。十九世紀の悲觀的な人生觀は此の種子に實れる果實である。彼等は今や美しき理想の虹に幻惑さるる可く餘りに賢かつた。醜くも悲しくも此有りの儘の人生、現實の姿丈が眞の實在であり倚る可き唯一の根據である。靜に諦觀せよ。若し改む可き點ありとすれば理想の姿は遙に遠い物であらふとも先づ小さき第一歩を此現實から踏み出さねばならぬと考へた。爰にも哲學の形而上學化と共通の精神が息吹いておるのを見出す。

幻滅の悲哀に傷きつつ現實を諦觀した十九世紀の人人からは如何なる思想が湧き出づるであらうか。曰く進化、曰く非合理主義、曰く科學及唯物論的人生觀等である。十九世紀は實に「進化」發見の時代と呼ばれる。現實は飛躍する物ではなく一歩より一歩へは徐徐進歩するものが其儂りなき姿であると言ふ思想である。先づヘーゲルの哲學に見る辯證法が論理學に於ける進化論であつた。次いでマルクスの唯物史觀は社會の進化を語る物であり、最後にダーウインの進化論は生

物界に於ける進化の現象を説明する物であつた。諸領域に於ける進化論が實に半世紀の間にかくも矢繼早に完成せられた事は誠に驚くべき現象であつて如何に進化の思想が精神の奥底深く徹したかがうかがはれる。固より當時は進化なる事實は現代の我が感ずるが如く欣み希望を以て迎へられたのではなく寧ろ其消極的の半面即理想の達し難き憾を述べた物であらふと察せられるのである。然らば斯る進化の原動力たる力は如何なる物であらうか。ヘーゲルは合理的なる理性であると言ふ。然しヘーゲルの此理想主義は寧ろ前世紀の遺物とも見らる可きであつて眞に佛蘭西革命の結果に失望した多くの人人は現實の底流に働く力をば非合理的な力、盲目の意志であると觀じたのである。此意味に於てショーペンハウエルこそヘーゲルより遙に増して十九世紀思想を代表する人であるを考へられる。

實在の根底を盲目の意志に見出した三十年以後の思想家達はかくて進化の動力をも亦此非合理的な意志と見るに一致した。マルクスは社會進化の根據を生産力の上におき、精神の構成物も所詮階級的利害の打算より産出せらるると説いて生きむとする意志の絶大なる力を力説した。又ダーウインは種の保存てふ盲目の意志の爲めに生物が環境に順應せむとする辛苦の跡を讀者に呈供したのである。十九世紀に漲つた斯る非合理的思想に然かも尙一つの共通點が存した、其は鬭争を以て進化發展の直接の刺戟と見た點である。ヘーゲルの辯證法は「正」に相闘ふ「反」ありて初めてより高き「合」の階段に達するを教ふる。マルクスの經濟進化論には階級鬭争の論が其中核を

なし、ダーウインにあつては生存闘争に適者生存こそ其必須の條件なれど力説する。かかる闘争及非合理の思想等は實に現實の生活の鮮かな反映でなくて何であらふか。非合理的な力による徐徐たる理想への近づきは誠に理想に幻滅を感じたる人人に相應はしい考方ではない。

現實を諦観し現實の生活の内に生き甲斐を見出さむと努むる人人が科學を尊長するのは亦自然の道行である。何となれば科學は一切の感情を棄てて唯あるが儘の自然の姿を純粹に説明し記述するからである。彼等十九世紀の人達は最早や希望に胸を躍す事に飽いた。彼等は唯靜に現實を觀察し、此を己が生活の方便に供して現實に即した幸福を樂しんで行けばいいのである。然して科學は又實生活を豊に満たして呉れる事を約束する。於て科學——即自然科學及歴史學が未曾有の進歩を見るに至つた契機が潜む。然して哲學に於てよくかかるブラグマチックなる科學の態度を是認し其根底を提供する者が實證論であつた十九世紀はかかる哲學を味方しつゝ科學萬能の時代を現出するに至つた。自然科學の大發見として曾て前世紀に其比類を見る能はざりし物はダーウインの進化論、シュライデン及シュワンの細胞の發見、ヘルムホルツのエネルギー不滅の法則の如き之である。歴史の方面に於ても亦偉大なる歴史學者踵を接して輩出した。ランケ及ランプレヒトの如き其代表的學者である。

之等の科學的諸發見は十九世紀の一般的思潮に胚胎した物であるが遂に如何なる影響を一般的思潮の上に及ぼして行つたであらふか

進化論は人類の祖先を猿に歸し更に遠く一切の生物の根元をアミーバに迄遡及せしむるに及んで神の觀念を動搖させる事少くはなかつた。嘗てはフォイエールバツハ等の宗教論に動されて宗教的信仰に動搖を感じ初めた人人の心に進化論は更に油を注いだかの觀があつたのである。更に細胞論は人體を構成する要素を細胞に發見した點に於て近代生理學に裨益する所誠に多く其結果生理學的心理学の發達を見るに至つたのであるが方法論上の混亂より我々の精神思想性格等之等精神的作用は腦髓の機械的構造、其構成物質に全然決定せらるるて唯唯物論に歸するの外はなかつた。更にエネルギー不滅の法則は宇宙構成の問題を論じて宇宙の本質は神でもなく、又觀念論者の主張する如き精神でもなく其は盲目的なる物質のエネルギーの大舞踏場であるを説く。其無目的にして機械的なる運動が宇宙を支配する。然かも其量たるや永遠に恒存して變化する事なく現象界に變轉する無常の姿は唯形の變化にすぎない。宇宙は我我人類が如何なる努力を拂ふても征服はおろか些の變化をすら加へ得ないを教へたのである。勿論之等の諸學說や諸發見も之を科學的假設の上に立つ物として相對的存在權を主張し得る。然るに十九世紀の冒した最大の誤謬は現實を尊長するの餘り知識の存立及可能の問題に一顧だも拂ふ事なく、科學の結論をば直ちに絶對化して哲學的主張した點であつた。爰に唯物論が一世を風靡するの結果を招くに至つたのである。此る唯物論的人生觀に従へば宇宙は唯一定量のエネルギーの偶然にして、恣意なる離合集散であり従て神が其恩寵に満ちた計劃

を以て自然及人生を祝福に向つて支配するに言ふが如きは笑ふ可き夢想であつた。更に人類は猿を其祖先に持ち彼の思想は腦髓の生理的條件の制約下に生ずる分泌物である。彼の誇る文明及社會制度は又實に機械の生産力の所産ではないか。彼の好んで口にする精神の自由、物質への優越は何所にある、其は物質の結合より出で物質の離散と共に消ゆる。カントやキリストの腦髓を構成した物質は今や嘗て粘土たりし物質と相並んで天空遠く漂へる事であらふ。

科學に立脚した十九世紀の唯物論的人生觀はかくも悲觀的色彩に濃く彩られた物であつた。然かも一八四九年の革命運動に失敗して以來の生活上の不安定、脅威はよく唯物論的悲觀論に共鳴させるに力あつた物である。此る悲觀、絶望の内から利那主義、享樂主義が現はれた。利那の官能の刺戟に傷ける苦悶を忘れむと努める人人の群である。更に虚無主義、自然主義が現はれた。生の悲劇に無知なる人人の齷齪を高所から見降して嘲笑する人人の群である。十九世紀の現實諦觀はかくも心痛ましき悲みに終始したのであつた。

八

十九世紀の大部分に亘つた悲觀的思想から然しながら慰めらるる時代が來た。十九世紀の末、二十世紀の初頭にかけての「生命」の發見時代が之である。

十九世紀の唯物論哲學が蹉跌した數多くの理由の内其の重要な一つは生命に關する不當なる解釋である。唯物論は科學の華華しい成功に唯譯もなく眩惑して一圖に其成果を絶對の眞理だと思ひ込み、其成果を生み出す智

識の働きに些の考察をも拂はなかつたのが落度であつた。智識の働きに深い洞察を下した十九世紀末の思想家達、特に進化論の強い影響下に立つて其立場より這般の問題に肉迫した人達は智識の範疇が生物體の諸機能と同様に如何に生命保存の目的の爲めに案出された物であるかの経緯を審にする事が出來た。智識は生きむとする目的の爲めに外界の現象をば最も勞少き方法によつて捕捉し貯藏する道具である。従て其持つ範疇は環境に順應するに最も合目的な物のみから成立つたのであつて其本來の性質は飽迄も實用的な物である、其起原がかく生物的條件に基く所以を明にする立場を Biologism の名を以て呼ぶが、かかる起原を有する智性は従て眞の實在に到達し得ない物である。ベルグソンの哲學は知性が實在を捕捉し得ない所以を説き明かした代表的な學說である。其所説によれば實在は持續する變化流動其物であり過去は現在に迄流續し更に未來へ發展して行く。其流續の各過程には眞の時間が齒型を残す物であるから流動は單なる變化ではなく刻刻の創造でなければならぬ。隨て具體的な實在は決して以前と同一の状態に戻る物ではないのである。之故に反復は唯抽象に於てのみ可能である。然るに我々の理知は實際的行爲の目的の爲めに使用せらるる物なるが故に具體的な實在の内から反復され得る物のみを抽象する。かく反復の一事を重視する理知は遂に時間を見落し眞の實在の姿を誤認する。理知は變化流動する物を嫌ふ。其は行動に不便なるが故である。如何なる現象と雖も一度理知に接觸すれば忽ち變化流動しない靜止的團體に化せ

られて終ふ。理知のプラグマチックな本来の
素性はかくして流動の眞實在には永遠に未知
の人として残らねばならぬと言ふのがベルグ
ソンの所見であつた。彼は實在に到達するに
は直観による可しと言ふ。然し愛には其積極
的な主張を考察するのではなく、唯理知が
眞の生命の深奥に徹する能力なき物である事
に注意を向けた。かかる理知の否定から直
接に痛撃を蒙る可きは唯物論である事は言ふ
迄もない。何となれば唯物論が使用する理知
其物が實在を認識し得る能力なく、特に生命
現象の解釋に至ては無能力なる事を道破せら
れたからである。

認識能力の生物學的考察はかく一方に於て
悲觀的唯物論を覆へず同時に他方に於て
「生命」の奥妙なる働きと其の創造的進化の姿
を開明して時代に欣き希望を興へた。理知
其自身は實在に肉薄し得る物ではない。然し
之を道具として利用する限生命は數多くの障
害を乗り越えて勇しく進化して行く。進化、
生命の發展こそは第一義である。理知は唯生
命を守り成長させる丈の道具に過ぎない。か
く見來るべき我は過去に於て如何に理知を
過長し過信した事であつたらふ。然し理知は
左程過長せらる可き物ではない。我は嘗て
は理知に於て疑はしい物は承認を留保せよと
教へられたが其は誤謬を犯すを恐るる者の態
度である。然し我は理知に忠實なるよりは
むしろ生命に忠實なる可しとジェームスは言
ふ。生命の必要さあらば疑はしい命題、否時
には誤れる判断すら信する権利ありとさへ叫
ぶ。生命に役立つ限其は眞理なりとのプラグ
マチズムの主張は此に發生するのである。

斯る生命主義的哲學思潮は實際社會に反響
を呼び起さずには去る物ではない。先づ我
の心身の自由なる活動と其による豊富なる
生命内容の創造を重んじ社會の成員の總べて
に各自の能力を發揮すべき平等なる機會を興
へむとするデューエー等の所謂道徳的民主主
義の主張が其第一の現である。更に生命に對
する熱狂から發生したサンチカリズムの社會
運動が其第二の例である。サンチカリズムに
あつてはプラグマチストに倣つて理知の力を
著しく安價に値踏みし歴史を支配する法則は
キャソリック僧の如き狂信と熱烈なる意志の
力であると言ふ。彼等にはマルキシストに見
るが如き資本主義没落の到來せりや否やの理
論は問題にならない。勝利の信念に燃えて其
「神話」に陶醉しながら唯最後迄の戦を續けさ
へすれば勝利は必らず來ると言ふのである。

時機尚早きは理知の空しき言葉である。ジェ
ームスの「信ぜむとする意志」に於ける信仰
現實化とは、實にサンチカリズムの中核をな
す。勝利の「神話」は理知を重んずる人々より
見れば確に疑はしい命題であり、從て信す可
からざる事である。然しながらプラグマチス
トやサンチカリストにあつては信じた結果が
効果ある可しと考ふるが故に信する権利があ
り、又信する結果が現實の事實となつて現は
るから眞理と言はれ得る言主張するのであ
る。我は其所論の當否を檢する前に先づ生
命哲學が時代を導いて失望、煩悶から奮進的
勇躍に迄轉向させた其偉力の前に感嘆する許
である。

然しながら生命哲學はかかる偉大なる使命
を果して後に來る者の爲めに取代らる可き淋

しき運命を其内に藏しておつた。其は生命哲
學の理論の矛盾と社會理想としての矛盾との
二方面から成る。

理論上の矛盾とは生命哲學の認識論が心理
主義的方法を採用せる爲めに起る矛盾であつ
てカント以前の英國經驗學派が心理學に基礎
を置いたのに對照して主として生物學を基礎
とした點に新味を有したが、經驗科學の上に
規範學を築き上げ様とした點に於て同様の難
點を免れ得なかつた。價値は存在より導き得
られざる論理を無視して、存在より價値を引
き出さむとした所に彼等の理論上の蹉跌があ
つた。此點に關しては少しく詳細に亘つて上
述したるが故に此に再び繰返す勞を省く。

斯る理論上の矛盾は其範圍を獨り認識論の
界にのみ止まらず一般文化の考察に於て行は
れた事は前に少しく觸れておいた。即潑瀾たる
生命の發展、自由なる伸張を以て欣ぶべき進
化と認め、之に逆行する傾向を以て悲しむ可
き退化なりと生命主義者達は考へたのである
然しながら少くとも爰に極めて重大なる問題
が看却されておらないであらふか。即我我が
今少しく思索を深むるべき生命の變化變形を
見て何故に之を直に進化或は發展と見、退化
と見ないのであらふかの疑問に接する。實に
進化と見、退化と判断する爲めには判断の標
準たる可き一つの價値を前提せざるを得ない
此標準に照し合せて右するを進化と言ひ左す
るを退化と名づく可きであらふ。此價値は經
験に先するアプリオリである。かく解して生
命主義者の言ふ所を忖度すれば彼等の所謂進
化とは唯價値なる内容の創造、發展を意味
する。決して單なる生活内容の創造に止ま

る物ではない。生命主義者の重大なる過は此
價値を看却した點であつた。數多くの社會運
動が眞に其本来の倫理的意義を護得し得るの
は實に此價値を實現し具體化するの結果であ
つて決して單なる解放其物ではない。解放が
よりよき社會即文化價値に近づける社會であ
り或はかかる社會への條件であるこの見極め
がついて初めて理性の承認と同情とを贏ち得
る。唯自由に生きる事が問題なのではなく如
何なる目的に向つて自由に生きるかが問題な
のである。爰に生活理想の確乎たる樹立が切
實に要求されるに至つた。認識論に於て判断
が眞理たる爲めには當爲價値を實現せねばな
らぬと全然同様に、生活様式が眞に論理的に
意義あらむが爲めには生活理想に參與する物
であらねばならぬ事が明にせられた。此る生
活理想とは「所謂」文化の概念である。二十世
紀は此意味に於て「文化」發見の時代である。
十九世紀の現實過長の時代思想は價値を虐け
等閑視した所に破産した。現代の哲學はかく
蹂躪された價値の權利を再び拾ひ上げ高唱し
た時に再びカントの理想主義に歸つたのであ
る。(終)

秋意 大村吳樓

籬の上に伸びあまたる朝顔の蔓は吹かれ二百十
日の風
朝顔の葉がけをぐらき籬根に蚊のこゑもる夕べ雨
かも
朝顔の古蔓除けし籬の上にしぐれの來たるころと
りにし
籬にからむ朝顔の蔓はぐし居ればこぼれて落つる種
の音すも
鬱陶しき曇りなれり胡座ある疊にちかく晝蚊啼き
つつ

京都皇宮沿革略

關西大學講師 新町徳之

平安京の皇宮は大内裏にある、中古大内裏が荒廢に及び幾多の沿革を経て今の皇宮となつたのであります。よつて今、茲に古に溯つて先、大内裏の大略を記するであらう。

抑大内裏は平安京の北位にあつて北は一條から南は二條に至り、東は東大宮通から西は西大宮通に至る南北四百六十丈、東西三百八十丈で、土垣溝渠を繞らし、四方には十二の宮門がある。南面の大門を朱雀門と云つて二重閣製である、朱雀大路(現今の千本通)の真正面にあつて、遙に羅城門と相望んで居る。其東に美福門があり、その西に皇嘉門がある。いづれも二重閣製である。東には陽明門・待賢門・郁芳門があり、西には殷富門・藻壁門・談天門・北には偉鑿門・達智門・安嘉門がある。なほ此の外に東に上東門、西に上西門があります。

朝堂院は大極殿の在る所で國家の正朝でありまして又八省院とも申します。朱雀門内にあつて東西が五十六丈、南北が百三十六丈あつて複廊が繞らされ、四方には大門が開かれる。而して南面の正門を應天門といつて二重閣製、左右に二重廊がある、相抱へて南に出て、翔鸞・栖鳳の二樓に接がる。大極殿は北位に據つて南面してゐる。東西は十九丈八尺南北は七丈四尺で其の屋は廟造、四阿は碧瓦で以て葺き、鴟尾をもて飾られてゐる。圍楹整瓦、丹雘粉壁すべて善美をつくし、中央には畏くも高御座が設けてあります。小安殿は其北に、蒼龍樓はその巽に、白虎樓はその坤

にある。南庭の南に龍尾道があり、其南に十二堂があつて東西相對してゐる。會昌門は應天門の内にあつて、その前に東朝集堂・西朝集堂があつて相向つてゐる。大極殿は桓武天皇(二四四——二四五)が殊に敬慮を盡して御造營遊ばされたもので、宏壯華麗、平安京第一の建築であつた。が惜かな貞觀・康平二回に祝融の災に罹り、天慶・延久に再造されなければ、また治承の火に災されて、その後遂に荒廢した。けれどもその規模が最も大きいから廢絶の後も其遺址を存した。後堀河天皇(一八八——一八九)の寛喜二年(一一八九〇)平家の家人貞能の遺子定阿といふ者が伊勢朝熊社の神鏡を盗み、宿意を遂げんがために之を大極殿壇礎の下に埋めて祈願したこゝがあり、後村上天皇(一九九——二〇二七)の正平十年(二〇一五)には足利直冬・同高經、桃井直常三千餘騎で大内の舊跡大極殿の額門の跡に陣したこゝがある。額門とは即應天門のこゝである。後花園天皇(二〇〇九——二〇二四)時代の歌人、徹書記(二〇四〇——二〇一六)の「草根集」に詠ぜる大内の芝生の礎も八省院のものに外ならぬ。それから北朝の後圓融天皇(二〇三二——二〇四二)は永和元年(二〇三五)即位の式典に猶其址に行幸遊ばされ大極殿のあま、龍尾道の前にて腰輿にめし移らせ、今はいづくとも見え草の原にてあれども、尙昔の跡を尋ねてめしうつらせ給うたこゝなごもあつた。明治天皇の御宇に此の大極殿址に京都市參事會の名で碑を上京區千本通下立賣下ル西入ルに建てた。その碑

大極殿遺址之碑

延曆十三年。桓武天皇相々此地。奠建新

都。號曰平安京。今京都即是也。爾來一千百年以至今日。實爲神州之舊京、宇内之名都矣。京都市民謹仰聖德。欽大勳。新營神宮。行祭事。以舉慶祝之典。事聞、詔特奉安桓武天皇之靈。列宮幣大社。號平安神宮。一準權原神宮。於是京都永爲宗廟之地。覺襟帶山河益發輝。是誠國家之盛典。而京都之光榮也。嗟盛矣哉。夫大極殿。天皇敬念所注。森嚴宏壯。爲國家正朝。實列聖之所登極。億兆之所瞻仰也。然其址埋滅。識者憾焉。仍據圖志。按式程。考查測定。得其遺址。建石以表之。且記紫宸殿等遺址。及京都大内四至。以誌後昆。苟按此碑以徵之。則延曆規模。可得而詳矣。明治二十八年三月 京都市參事會

紫宸殿 良 八十五丈
應天門 正南 百二十一丈
太政官 巽 九十七丈
大内裏四至

北 偉鑿門 二百八十九丈
南 朱雀門 百七十一丈
東 待賢門 百九十二丈
西 藻壁門 百九十二丈
平安城四至

北 一條大路 二百九十五丈
南 羅城門 千四百四十丈
東 京極(今寺町通) 七百四十八丈
西 京極(御室川東畔) 七百四十八丈

皇宮は大極殿の東北にあつて南に建禮門、東に建春門、北に朔平門、西に宜秋門がある。之を皇宮の四門と申します。その内に中隔がある。重廊を繞らして、南に承明門がある。

その内に紫宸殿がある。九間四面で南面して南階が十八級あります。その左に左近の櫻、右に右近の橘がある。紫宸殿は内裏の正殿であつて内朝儀式が行はれる所である。賢聖障子、負文龜の繪は此にある。清涼殿は常の御所であつて紫宸殿の乾位にある。晝御座・石灰壇・夜御殿・臺盤所・朝餉間・弘徽殿・桐壺・秋戸は此殿にある。その庭前には吳竹・漢竹の臺がある。その他仁壽承香・宜陽・春興・安福・校書・綾綺・温明・常寧・貞觀・麗景・宣耀・弘徽・登華の諸殿、昭陽・淑景・飛香・凝華・襲芳の諸舎は皆此内にある。金殿雲に連なり、玉樓日に輝き、千門萬戸、層疊相屬し、本朝皇居の制、皇城の建築は此に至つて始めて大成せるものといつてよいのであります。

其他、豐樂院・武德殿・中和院・神祇宮・大政官・八省・百司を始め大内裏の内にあつた。これが奠都後百六十七年目で、それから二百餘年の間に十數回の回祿があり、その度毎に再造がある。王政は漸く振はず、藤原氏が大權を專にしてよりは皇宮は益々荒廢に赴き、源平二氏を歴て大權鎌倉に歸するに及んで皇宮の造營すら幕府の力を待たなければならぬ事となり、後鳥羽天皇(一一八四六一一一八五八)文治五年(一一八九)三月源賴朝に勅して大内を修理せしめられた。十二月に功成りて閑院の内裏から御遷幸あそばされた。これが第十六回目の御造營であります。その後、仲恭天皇の御宇の千八百八十一年に承久の役が

あつて朝威は益衰へ後堀河天皇(一八八二—一八九二)貞安元年(一八八七)四月の火災に罹つて大内裏の皇宮は烏有となり、後醍醐天皇(一九七九—一九九八)建武中興の時、造營の朝議はあつたけれど其功を果さず。是からは永く荒廢して、その舊址は内野と稱して、廣漠たる荒墟であつたから、南北の争亂已來は常に戰場となつた。正親町天皇(二二一八—二二四六)天正十四年(二二四六)二月豊臣秀吉が聚樂第を此地に營して、後陽成天皇(二二四七—二二七一)天正十六年四月にその行幸があり、一時の繁華を極めた。かくて後は豊臣秀次がこの聚樂第にゐましたがその敗後その邸は毀たれて、再び荒廢し、今は一般に人家市街となつた。

現今の皇宮はその初め東洞院土御門内裏と云つたものがその起源であります。が大内裏の皇宮が廢頽したによつて里内裏となつて、土御門殿・閑院殿・大炊殿・富小路殿等御在所となつて、間間大内の皇宮に擬へて、紫宸・清凉の諸殿を造營あつて、公事儀式もこゝで行はれる事となつた。

今の皇宮は南北分裂の初頃から北朝の皇宮となつたのが初めである。此地は本來藤原氏の傳領で、大納言邦綱卿の家であつて、高倉天皇(一八二九—一八四〇)御讓位の後暫く此に遷御の事があつた。その後、年所をへて里内裏となつた。元弘元年(一九九二)御醍醐天皇(一九七九—一九九八)笠置へ御潜幸の時、同年九月二十日茲に御即位をさぼし、未だ幾年ならずして光嚴院は廢せられ、延元元年(一九九六)足利尊氏(一九六五—二〇一八)

が北朝を立ててから、遂に皇宮を定められた。此から南北分裂五十餘年後に後龜山天皇(二〇二八—二〇五二)元中九年(二〇五二)に及んで南北合併、天皇神器を後小松天皇(二〇五三—二〇七二)に御讓りになつた。後小松天皇此殿にて更に神器をお受けになつてから京都は再び正統天子の皇宮となつた。皇宮は鎌倉・室町・足利氏等皆時に修理を加へ或は造進する事となり、其度毎に漸く地域を廣め、宮殿を造り、皇宮の制を爲した。然るに足利氏覇業振はず、權豪跋扈遂に應仁、文明の大亂となりては汝や知る都は野邊の夕雲雀あがるをみても落つる涙よき飯尾彦六左右門を泣かしたこゝであります。これからは皇宮は敗頽に任して殆ど風日も掩ひがたき迄に荒れ果てたは後柏原天皇(二六一—二八六)の大永、後奈良天皇(二八七—二二七)の天文の際であつて、皇宮も京都も千百年の間に此の如く荒廢に屬したこゝはなかつた。正親町天皇(二二八—二四六)の御宇に立入宗繼密に萬里小路帷房に依つて織田信長(二二七—二四二)に密勅を賜つて中興の大計を托せらるべきこゝを請ひしこゝ、其議を用ひ、永祿七年(二二四)に熱田宮奉幣に托して信長公に密勅を賜つた。それから中興の機は此に啓り、同一年織田公入京に及んで首として皇宮を修理し、供御を附し、轉退の公卿を復し稍再造の運に逢ふた。豊公が織田氏に代るに及んで、地域は廣められ、皇居は造營され、殿舎は増されて、漸く宮闕の體を備へ、禁廷の制が初めて備はつた。天正十六年(二四八)四月十二日聚樂行幸があつた。此時 御料を獻じ、公卿以下の食邑を定めた。

徳川氏に及んで御陽成天皇(二二四七—二二七一)慶長十六年(二二七一)に皇宮造營の事があつた。豊臣氏の規模を更に廣め、舊殿を撤して更に之を經營した。是に於て朝廷の儀式も稍其舊に復するこゝとなつた。其後皇居の火災に罹つたこゝ數回あれど、常に幕府から造進した。光格天皇(二四四〇—二四七六)の御宇、天明八年(二四四八)正月晦日の大火には京都の大半は焦土となり皇宮も亦免れなかつた。此時天皇復古の御志があつた。皇宮再造古制に則するべきよしを幕府に勅令があつた。第十一代將軍家齊公(二四四七—二四九六)は閣老少將松平定信(二四一八—二四八九)に命じて其役を董さしめ、時の大儒柴野邦彦(二三九五—二四六六)等に命じて有職家之故實舊例を考證して、紫宸殿・清凉殿・宜陽殿等から南廷・承明・日華・月華の諸門陣座、軒廊など大内裏の時の規制に基いて造營せられ、皇宮の外廷に屬する部分も古代の正式に復した。北條氏已來、略式にのみ成行し皇宮が古制に復したのは實に盛舉といふべきで光格天皇は長くも宸翰を御染め遊ばして長篇の御製を將軍に賜つた。其詩に、

遙慕周文、不羨漢武、舊章一是率、新築本非催、百工忽告竣、整駕自東回、拭目向城池、城池亦善哉、兩殿應規矩、四門總崔嵬、燕雀繞檐集、櫻橘挾階栽、豈其爲逸豫、講禮共徘徊、委佩群僚會、將幣九州來、素心既已足、起臥感鹽梅、欣然歌思動、乙夜薄言裁。

上皇亦御製の和歌を賜つた。曰く、殿つくりのみがきたちたる嬉しさの心を見する大和ここの葉、此宮闕復舊の事は他日王

政復古の基となつて、明治大正の盛世を開ける淵源ともいふべきであります。さてその後孝明天皇(二五〇七—二五二六)の嘉永七年(二五二四)四月六日大宮御所から失火して皇宮は炎上した。此御宇は外患始めて萌し、國家多事の時であつたから、皇宮改修の欲慮もあらせ給へど、唯西南の角を取廣げて正方形にせられただけで、其他は大凡寛政造營の舊式に仍らるる事と定まつた。安政三年(二五二六)に造營の功成り、同十一月二十一日儀衛鹵簿を備へて、桂宮行宮から新造内裏に還幸あらせられた。是れが現今の皇宮であります。明治天皇(二五二七—二五七二)は明治元年(二五二八)八月二十七日に紫宸殿で即位の大禮を舉行させられ、九月八日には一世一元の制を定め給ひ王世復古の大業、中興維新の盛運を仰ぐ御代となつたのであります。車駕東行の後に不用の建物は多く取毀れたけれど、紫宸殿・清凉殿・常御殿・小御所をはじめ益修繕が行はれ、明治十年(二五三七)御駐蹕の時、千年の舊京を重んじ給ひて、即位の禮・大嘗の式は此皇宮で行ふべき勅定があらせられてから明治二十二年(二五四九)二月十一日皇室典範を御制定あそばさるるに及んで、其第二章第十條に即位の禮及び大嘗祭は京都に於て之を行ふと規定遊ばされた。よつて車駕東行あらせ給ふとも平安京は永世の皇宮であつて、桓武天皇建都の欲慮は山河と共に千秋萬歳に動かぬこゝと定まつた。誠に慶祝し奉るべきこゝであります。

皇宮の内部のこゝは早く「百敷」・「寛政内裏造營記」・「雲外秘抄」・「安政内裏造營誌」・「鳳闕見聞録」・「洞中圖解」・「平安通志」・「京華要誌」

「御所乘」なごいふ書が世間に行はれてゐるから、其等の諸書に基き、且つは見聞するところを加へて其概略を記さう。

皇宮の地は初は東洞院の東土御門通の南方一町の地であつたが歴年の久しき漸く地盤を擴め、今は東洞院から舊萬里小路に至り、鷹司から一條の上に及び、東西百三十七間餘、南北二百四十六間餘である。舊時の地盤は殆ど七八倍で、大内裏の時の皇宮の地盤よりは大であります。

宮門

建禮門 南面の正門である、屋は檜皮葺又南門とも云ふ。

建春門 東面の正門である、屋四棟檜皮葺、又日御門とも云ふ。此邊殊

に風景絶佳で都富士の比叡山が高く霞を帯びて聳え如意嶽東に連りて大文字の火の夕を想はしめる程であります。

宜秋門 西面の正門である、屋檜皮葺、又公卿門とも云ひます。此門の

北側に清所御門と申すのがあります。これは一般通行の門であります。

朔平門 北面の正門である、屋は檜皮葺。建禮門内にある。瓦屋東西築五

間、戸三間、丹雘白壁。中央は陛下のみの御通路であります。承はつてゐます。其の内を南廷と云ひます。

日華門 南廷の東にある。丹塗白壁、瓦葺です。

左掖門 同上。一に長樂門ともいひます。

月華門 南廷の西にあります。

右掖門 同上。一に永安門ともいひます。

廻廊 東は宜陽殿から西は清涼殿の南から、南に向つて相折れて、承明門に接する。瓦屋丹雘白壁、隔つるに檻子を以てし、内外に分つてあります。

紫宸殿

九間四面、屋は東西築であつて、檜皮葺、中央を身屋とし、四面に廂がある。拭板

(敷廂外に簀子があつて勾欄(欄干)を設け南階十八級、四隅の階凡九級、身舎の中央に玉座たる御帳臺を設け、北廂(一に御後といひます)の障子には賢聖像・負文龜の繪がある。其の裏面は飛鸞桐花の紋様を寫してある。南階を挟みて左近の櫻、右近の橘が植えてあります。その左

近の櫻は元は梅であつたのを仁明天皇(二四九四—一五一〇)の御代に櫻に御改めになつたので只今あります櫻は孝明天皇(二五〇七—二五二六)の安政二年(二五二五)に凝華洞に在つたのを御移植あそばされたのであり、橘は同じ安政二年に北小路差次が藏人の亭にあつたのを御移植あそばされたのであるといふことと云ひます。紫宸殿は南殿といひ、其庭を南廷と申します儀式の行はれるところである。畏げれども、今上陛下の即位の大禮も茲で舉げたまふたのであります。

紫宸殿の三字は治部大輔賀茂縣主保考(二四五七—二五三八)が勅を奉じて書いたものである。

賢聖障子畫 狩野榮川院典信の筆である

この繪は宇多天皇(一五四八—一五五七)が寛平のむかし巨勢金岡に勅して畫かしめ給ひしものであるが、中代から其傳を失つたのを、寛政造營の時に考定して、古制に復されたものである。軒廊 紫宸殿の巽の階から宜陽殿に赴く所の土廊である。軒廊のトは此で行はれる。

左近衛陣 紫宸殿の良の階から宜陽殿に赴く廊である。陣の座といふ養由基の障子は此に建てられてあります。

恭禮門 内衛門 明義門 仙花門 崇政門 左青瑣門 右青瑣門 敷政門 宜仁門

是は清涼殿・紫宸殿・宜陽殿の間に、ある掖門で、皆古式による。

清涼殿

九間四面、東に向ふ。屋は檜皮葺、南北築であつて、中央を身舎とし、御帳を建て畫御座とする。これは紫宸殿にある御帳臺と同じであります。其南に東廂がある、東廂の南に石灰壇がある。身舎の西に臺盤所がある。其南に鬼間があり、畫御座の北に夜御殿がある。其北に藤壺・上御局・萩戸・弘徽殿・上御局がある。

二の間は夜御殿の東にあつて、朝餉間は夜御殿の西にある。その北には御手水の間がある。東廂の外に孫廂があつて、殿上は南廂をいふのであつて、孫廂の外に簀子がある。欄干を設け、南階がある。その砌には御溝水が流れて、庭上には吳竹・漢竹の臺がある。

清涼殿は式の常の御殿であつて、昔は此殿

に御任る遊ばされた。故に總てむかしの儘に御造營あつて、彼の楡形・鳴板・塵坪・荒海障子・混明地障子なごに至るまで皆古式によつて作られてあります。

襖繪は身舎は絹張紺青引極彩色、椽は軟錦青地、繪は唐繪、詩句の意によつて寫してある。その他は大和繪であつて、名所を寫し、式紙形には和歌を題せられ、畫は土佐光清の筆になるといふことあります。

宜陽殿

紫宸殿の巽にあつて、軒廊から紫宸殿に至る。屋は檜皮葺で西面し、大臣宿所・公卿座・次將座・議所なごがある、是亦古式を摸された。

春興殿

大正度の御大禮の際に新に建築あそばされたもので賢所奉安所でございます。宜陽殿の東に位し外陣・内陣・内内陣の三つから成つてゐる承はつてゐます。この地位は元の温明殿の地位で明治二年(二五二九)三月東駕東幸と共に賢所は東に遷り温明殿は奈良縣橿原神社に賜はつたのであります。

以上皆大内裏の時の規制に基いて、一一故實を備へ、舊式によつて造營せられた、故に皆古風を存し、正式に合し、今も大内裏の御時を眼前に髣髴するこゝが出来ます。是全く光格天皇(二四四〇—二四七六)の御旨に出で白川少將松平定信(二四一八—二四八九)の力に成りし事で、誠に盛事といふべきであり、百敷のふるきためしをしのぶにも誠にめでたき宮に仰ぎ奉るべきであります。是より次は中古以來の規制で、所謂寢殿造の風を交へた

造營である。上段御帳臺、中段下段又は御小座敷、一の間、二の間、申口の間の名がある。白木角柱、疊敷、遺戸、天井は二重小組格天井・小組格天井・猿頬天井・繁垂木等の別がある常御殿・小御所・御學問所・御涼所を主とし宮殿・亭舎及び後宮諸司の舎屋が甚だ多い。雑舎は近年毀れたから記さず。宮殿は所謂雲上の御事で、細に記すは恐多い事なれば慎みて其要を摘みて之を記します。

常御殿
御所の東部にあつて、東面してその前に林泉樹石の觀があり。其屋檜皮葺、東西榮四阿、梁行十二間二尺、桁行十五間四尺、皇宮中第一の大殿であります。御上段・御中段・御下段は南にあつて西面してゐる。各十八帳、御清間は御上段の北にある。御寢の間はその西にある。劍璽御間は御上段の東にある。御小座敷は又その東にある。一の間・二の間・三の間は東北にある。御次の間は三の間の次にある申口の間は西北にある。四方に廂がある。廂外椽があつて、欄干を設けて階がある。上の口間の襖繪は黒繪泥引、和歌の浦の景色。小襖は絹地砂子泥引中彩色花に鶯水に蛙。下の口間は黒繪泥引、耕作の圖。其他舞樂の圖、四水の圖、蹴鞠の圖、武陵桃源の圖なきがある。皆時の名手の筆する所であります。

小御所
紫宸殿から長い廊下をへて東北に行きます。小御所にまゐります。屋根は檜皮葺で南面し、御間は三段に分れ、御上段は三間四面で十八帳、中段下段皆同じ。東

に二間に十一間の廂がある。北西面俱に一間半の廂がある。四方椽があり、欄干を設け、東西及び南北に階がある。上段は二重折上小組天井にて、襖繪は紺青極彩色に、豊樂院元日節會の圖を繪く。狩野永岳の筆である。古時朝儀の様が見せられて長い極みであります。其他名所風景、花鳥遊覽、和漢故實等の圖である。式紙形に和歌を題し、殿前林泉の風光最も清雅を極めたりといはれてゐます。

御學問所
小御所から長廊をへて北にある。御上段・中段・下段・菊の間・山咲の間・雁の間・東御座敷なきがある。襖繪は砂子極彩色にて十八學士登瀛洲の圖、又蘭亭の圖、岳陽樓の圖、其他四季花鳥等の畫あり。殿は東面で小御所と相並んで林泉に對してゐる。現今では京都行啓のあつた際に茲が勅任官以下の御謁所になります。

御涼所
常御殿の北にある。長廊をへて此所に至る。上御間・次御間・裏御間なきがある。奇麗風流の構造であつて、その東北には樹石交錯清泉潺湲眞に御涼所の名に負かぬ。

御三間の御殿
常御殿の西南に接し、南面してゐる。上段・中段・下段四方の廂は例の如くで、上段總雲取は砂子泥引地に大極殿朝賀の圖を極彩色で畫く、住吉内記の筆で、古代元朔の大禮目前に見るが如くである。中段は賀茂祭群參の圖、下段は駒引の圖であります。

迎春の御殿
常御殿の北御涼所の南にある。東面に額があつて、迎春の二字がある。その前に小門がある。樹老ひ、石古り、清泉その間に沿ふて鳴る。林泉の觀が頓に改つて恰も深山幽谷の趣があるようであります。

聽雪の御茶亭
迎春の御殿から北にあつて潺湲たる流泉の上に曲廊を架し、苔巖老樹の間を過ぎて亭に至る。風流清雅の構造であつて、其中に茶室水屋なきがある。聽雪の額はその南軒に掲げられてあります。

錦臺
常御殿の御庭の東南隅にある、四帳半の小亭であつて、西南に向つて椽がある。南に物見があり、秋晚紅葉に宜きを以て此名があるといふこゝであります。

泉殿代
御臺の林泉から東北にあつて、八帳三六帳の二間で、西に椽がある仁孝天皇（二四七七—二五〇六）の文政大地震の時、新築になつたのであると承はつてゐます。

林泉
皇宮の東方小御所の前から一圓の林泉であつて、樹林森蔚、池水漾漾、奇石老巖、點點相疊み、或は峰を作し、或は溪をなす、岬なり、洲なり遠きが如く近きが如くいつた状況で、鴨川の水を引いて朔平門の東から入つて、御溝水となり、又泉水の源となり、屈曲轉折して溪流となり、或は奇石斷崖に懸りて瀑布となる。それに處處圮橋石梁を架し、或は小舟を

浮べ、奇樹嘉木、名花芳草其間に點綴し白鶴汀に咲き、幽禽花に囀じ、天然の風致を極め、禁園の勝概、雲上の清覽、眞に仙境神區であつて、到底人間の想ひはかるべきところでないといふこゝであります。

皇后宮御殿
皇宮の北にあつて舊三別に一區をなしたが、近年常御殿・飛香舎代舊若宮及び姪宮の御殿玄暉門の外は取毀ちになつて、其の區域を定められたこゝに承つてゐます。

朔平門
北面の正門であつて、正式の建築である。此御門は古來常に閉ぢられてゐる。

玄暉門
朔平門の内にある。皇后宮の正門であつて、古式によられた。

常御殿
皇后宮の正殿であつて、玄暉門の内にある。大凡皇宮の常御殿の制の如くである。其他は略す。

學 內 報

松本學長伯父

目賀田男の逝去

本學學長松本蒸治氏の伯父君に當らるる樞密顧問官目賀田種太郎氏は去月十日朝七十四歳の高齡を以て病氣のため長逝せられた。ここに謹んで弔意を表する次第である。

本學教職員團の觀月會

去月廿一日は恰も舊曆八月十五日に相當したので、本學教職員有志十數名は、同宵千里山學庭に於て觀月會を催し、所謂「月觀る月」を觀賞した。尙ほ明年よりは出来るだけ多數を誘引して、年中行事の「こせんこ」を談合つた。

「大學祭」制定

本學大運動場の竣工を機とし、來る二十三、四兩日に亘り、同運動の開場式を兼ね、本學創立四十周年、大學令に依る大學新設四周年等を祝賀するため、各種の運動競技大會、講演會、展覽會等を開催する豫定で目下頻りに準備を忙ぎつつある。尙ほこれを機會に大學祭なるものを制定し、毎年十月下旬の適當の日を選んでこの種の催をなすことになつた。

武内教授實業同志會

市民講座部雄辯講座

講師を委嘱せらる

本學教授武内省三氏は實業同志會市民講座部の委嘱を受け、本月四日より開講の同部雄辯講座に於て論理學を講ずることになつた。

本學專任教授 講師著書一覽表

最近、本學專任教授講師の著書名を纏めて本誌に掲載されたき旨の諸君の希望を、一再ならず耳にしたので、左にその主なるものを紹介する。調査意に任せず脱漏せるものもあるかも知れぬが、他日更めて訂正補填の機會があることと思ふ。

學長 松本蒸治氏著

- 商法原論(絶版)、有斐閣發行——商法總論(五版)、中央大學發行、定價五圓——會社法(上卷)同上發行、定價貳圓——會社法講義(二十九版)、東京嚴松堂發行、定價四圓五拾錢——商行爲法(二十八版)、中央大學發行、定價參圓五拾錢——手形法(十五版)、同上發行、定價六圓——保險法(十一版)、同上發行、定價參圓五拾錢——海商法(十六版)、同上發行、定價參圓——商法改正法評論(絶版)、東京嚴松堂發行——私法論文集(改訂再版)、岩波書店發行、定價八圓五拾錢——(註釋民法全書)入法人及物(分册第二)、同上發行、定價貳圓五拾錢——商法判例批評録(再版)、同上發行、定價五圓——商法大意、同上發行、定價參圓八拾錢。——尙ほ東大教授田中耕太郎氏との共著になる註釋日本商法(三版)、地方行政學會發行、定價參圓八拾錢がある。

教授 宮島綱男氏著

An Introduction to the Study of Commerce

- (絶版)、東京實文館發行——保險論(第一編總論)同上發行——保險論(第二編各論)、同上發行——經濟學原理(上卷)、東京瞭文堂發行、定價參圓五拾錢

教授 沖中恒幸氏著

金融機關の綜合的研究、東京嚴松堂發行、定價四圓

教授 佐々穆氏著

國際私法要義、清水書店發行定價參圓——國際民

商法撮要、大同書院發行、定價參圓參拾錢

教授 岩崎卯一氏著

社會學の人文と文獻、刀江書院發行、定價參圓貳拾錢

講師 山村喬氏譯

消費組合運動、同人社發行、定價四圓八拾錢

講師 新町徳之氏著

近古文學選、内外出版株式會社發行——中古文學選、同上發行——上古文學選、同上發行



講師 木下孫一氏著

最新書翰文作法及文範(八版)、關西書院發行、定價貳圓——日本憲法要論(絶版)、大同書院發行——國民教育法大意(再版)、瞭文堂發行定價八拾四錢——最新日本憲法論、東京嚴松堂發行定價參圓五拾錢。

關西大學第二

商業學校彙報

教諭委嘱 今回第二學年第三學年銀行簿記擔任として依田亮吉氏を教諭を委嘱した。
第三學年卒業旅行 本校第三學年生は去る九月二十三日から宮島、別府方面に卒業記念旅行を催した。會する者五十二名山崎、神保、森川の三教諭に引率せられて同日午後五時大井川丸にて天保山發、同夜を船中に過し、翌二十四日は殆ど終日瀬戸内海の風光を愛でつつ夕刻宮島着、嚴島神戶に參拜し同夜九時出帆の龍田川丸にて別府に向ふ、二十五日朝別府着、直ちに汽車にて龜川驛に至り海地嶽、鶴見地嶽等を見物して別府に歸着、同夜は同地の旅館に一泊して記念の茶話會を開いた。翌二十六日午後一時紫丸にて別府出帆翌朝志なく歸阪した。

關西甲種商業學校彙報

職員異動 去月一日附を以て、西本壽一郎(數學科擔任)、神原謙藏(商業學科擔任)兩氏を教諭を委嘱した。又教諭秋山卓爾氏は去月十九日に逝去せられた。

劍道大會 去月十九日對外劍道大會を舉行す參加校數三十五(一校選手二名)、二十三勝九敗の好成绩を以て盛大裡に閉會す。

第十二回水泳練習 去る七月十九日より向ふ十日間夏季水泳練習を甲子園濱に於て舉行す、出場人員教師共三百七十四名、多大の効果を收めて無事終了す。

第四回校外相撲大會 去る三日午後一時より本校校庭土俵に於て第四回校外相撲大會を開催す。出場選手十數校約三十名、成會裡に夕刻閉會す。

校友の面影

大阪毎日 新聞社記者 大村 吳 樓氏
大正六年法律學科出身

氏は明治二十八年七月府下池田町に生れた。大正三年府立堺中學を経て本學法律學科に入學し、大正六年卒業、直ちに大阪毎日新聞社に入社し、以て今日に及んでゐる。その間約二十餘年餘門司支局に在勤したことがある外、終始本社に在つて一日の如く精勵し、現に同社校正課助役の要職にある。

氏は奇み新しのみを追ふに寧ろ日もない時流に超越して自ら穢さず、「主義は？」と問へば「平凡主義」のみ答へて餘言もない。凡に非

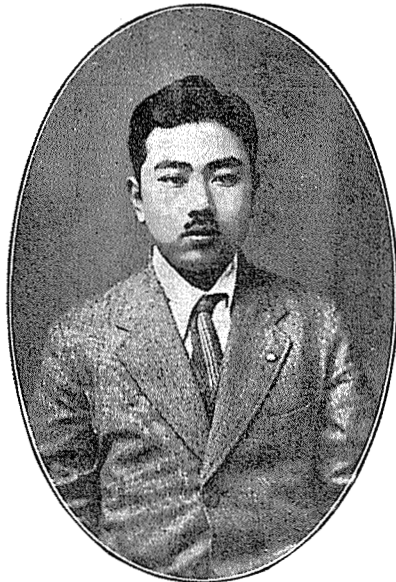
る氏の風格がこの一語に彷彿されて餘りがある。眼まぐるしい轉變と浮沈の多い操觚界に於いて、歩一步自らの赴くべき道を開拓して遂に今日を招

來した氏の心境も亦窺はれるのである。趣味に就いても、その範圍甚だ廣く、圍碁、將棋をはじめ、その他何にまれ相當興味を有するを氏自らも欣びましてゐる。蓋し、數奇風流の道は、内に燃ゆる詩的情操の所有者た

る氏にまじりては、最もその性格に適應するころであらう。

「歌俳の道亦面白く、目下アララギに籍を有し作歌に精進罷在候」は氏の近信の親しく語るころである。趣味も、初めは興味に惹かれ、暫ては自らを忘れて對照の中に没入するまで墮し、更に進み入るに及んで三昧の境に到れば劃然として自己の本體をその對照の中に見出しつつ悠悠自適するを得るに及んで極まるものであらう。若し然なりとすれば、氏に於ける歌俳の趣味は蓋しその後者に達せるものであらう。

内燃する詩情を、ひそり歌俳に寄せて自ら楽しんでゐる氏の心境は羨むでも尙餘りあるものである。筆者は幸にもその最近の詠稿を頂いて別項千里山歌壇を飾ることが出来たのは望外の喜びであつた。



大村 吳 樓氏

「鬱陶しい政界の現状を見るにつけ、複雑化された現代の生活様式を思ふにつけ、簡明直截であり、素朴至純そのものであつた萬葉人の政事生活を戀ふるころ愈切なるもの有之候」は最近の氏の感想の一端を漏して筆者の間に答へられたものである。

家庭は氏の母堂と令閨との三人暮りして、閑寂

な氏の心境に詩情を湧かしむるより切なるものがあるであらう。

本學校友中、操觚界に於いては比較的寥涼の感がないでもない。勿論それは學校の性質上無理もないころではあるが、氏の如き校友を見出すころは一人筆者のみの欣びではあるまい。擱筆するに臨んで氏の筆硯に益光輝の加はらむことを祈る所以である。



柏原 好郎氏

大正七年法律學科出身 署長 地方警視 柏原 好郎氏

過般大阪府警察官の移動が行はれた結果、天王寺警察署長より大阪港水上警察署長に榮轉と同時に警視に昇進し、異数の榮進として、巷間に喧びすしく語り傳へられてゐる氏を水上署に訪れて、親しく祝意を表しその感想を叩いた。

春に逢つて綾爛の美を競ふ花にも、凛烈な霜を忍ぶ數句がなければならぬ。名も亦一日にして成るのではない。暫らく筆者は、氏が過去の半生を顧りみ、その營營の跡を覗ひ、氏に於いて今日ある又偶然ならざるを學びたいと思ふ。

氏は香川縣の産、明治十八年五月孤孤の聲を

舉げた。中學を中途退學し、丁年に達するや騎兵として兵營生活をするころ三年、滿期除隊と共に飛圖頻りに動いて、勃勃たる勇心押ゆるに術なく明治四十三年の夏單身大阪に來り、職を警察に奉ずるに共に、その餘暇を惜んで孜孜として學事に勉めた。大正三年關西大學法律學科に籍を置いて一層の努力を續け、同六年卒業試験を前にして、またまた東京の警察官練習所に入所の

爲卒業試験を受くること出来ず、七年に到つて卒業試験を受けた。既に大正六年に警部に補せられ、異常の努力と明晰なる頭腦と、慧敏にして周到なる手腕とは充分に認められ大阪府警察部詰まなつた。大正十二年より翌十三年にわたり池田警察署長、十三年夏より府警察部高等課長、昨年十月より天王寺警察署長等を歴任して來た。

趣味は馬術、劍道、柔道等で、馬術は會つて騎兵たりしころよりさもありぬべきころで、劍道は三段、柔道は目録と言ふがら優に初段の實力はあらう。以つてそれ等に於ける氏の達域の一般を窺ふことが出来やう。

氏は永い官海生活をして來た人のやうに思はれぬ慈顔の主である。一見恰も慈父に見ゆる如きなつかしみを覺えしめる温顔の主じて

ある。氏の部下となる人の幸福が思ひやらるる。然もその寛潤な態容言動の衷に犯し難い威嚴が熾し銀の如き床しい光輝を放つてゐる。「私は入隊前までは、いづれかと言へば腺病質的な體格でしたが、兵營生活を終えてからは健康の増進と共に非常に氣が慥かになつたやうに思ふ、身心共に試練を経た爲でせう」氏の言は内に響く底力のある聲により對者に深い感銘を與へる。

「趣味としては、馬や劍道なごですが、職業上の必要から語學に精力をつくしたりしたことがありました。語學には趣味もあつた爲め可成長年月精出しました。英語だとか露西亞語なごやつたのですか遂にものにならずしまひです。語學なごやるより、今少し法律なご専門にやつてるたら、もつこ出世出來たかも知れませんが……」ご飽くまで自らを鼓張しない人である。警察官中には往往語學に興味なき人を見るも、氏の如く、或は東京に於いては正則英語學校、大阪にては外語專修科等に切磋琢磨を怠らず陰を惜んで柴薪につこめし人を吾が校友に見出すごは吾人の喜びとするごころご共に、東洋のマンチエスターの門戸を要扼する要官に今日氏を見る、また故なきに非ずの感深いものがある。

「私は自分のモットーとして、部下に對しては常に自らに間違のないごを心掛けてゐます。一人一人の個性をよく理解するごにつこめ、それぞれ充分に伸ばしてやりたいご思ひます。つまり何事も口で示さずに實行で示して行く主義です、今も劍道の練習中なので見てゐるごころです。

それから處世上については、不遇な時に自暴

自棄を起さずに勉強するご、職務は勿論精神的に言つても、不遇の際こそ人の運命が決せらるるごきです。私はこの心で今迄不遇の時に最も努力もし勉強もしました。そしてやはり、そんなごきがいちばん勉強も出來たやうです」

先輩の稀なこの大阪で今日を礎きあげたのも此の意味ありたればこそご點頭かれる。

「時事問題についての御感想は」ご聞けば、「職掌柄つしみたいご思ひます」ごのこごゆえ、在校生のためにごその最近の所感を徴せば、

「現代はだんだん實力の尊ばれる世の中ごなりつつある。だから世に出る人ごしては役に立つ人でなければ駄目だご言ひたい。私の署内にも立派な肩書や資格のある新人が多數ありますが兎角肩書のある人は實力の方面がおろそかになるごがある。勿論私は經歷や資格を無視するごでない。實力を有しその上經歷の見るべきものあれば是に越すごはないご思ひます」

校友會愛媛支部事務變更

本學校校友會愛媛支部では今回都合に依り同支部事務所を大正十六年三月末日迄左記の所へ

校友彙報

移轉した。

愛媛縣伊豫郡北山崎村三島町 長埜友市氏内

校友向井重太郎氏より來信

前號所報去る七月二十二日神戸出帆の箱根丸にて渡歐した校友向井重太郎氏は九月一日附にて次の如く安着を報じて來た。

「八月三十日マルセーユに上陸一萬哩の航海を終り候航海中の上陸地は完全に視察仕候八月三十一日午後十時パリに到着、少時滞在の豫定にて其後ロンドンに向け出奔可仕候マルセーユにて戸田氏よりの來信受取り喜び居候マルセーユ・リオンはロンドンよりの歸途少時落附く考へに有之候、何分パリは世界のバリーにて得るごころ多く相當多忙に働き居候いづれ又後便にて申上ぐ可く候 敬具 パリにて」

校友内藤糾夫氏出發

既報校友内藤糾夫氏の渡歐は其後諸般の準備整ひ、去る九月三十日正午神戸出帆の郵船北野丸にて出發親戚、大原社會問題研究所職員其他同窓生友人等多數見送つた。

校友動靜

濱松 參氏(大七商) 先般高山高等女學校を辭職し香川縣小豆郡苗初丸金醬油株式會社に入社した。
吉川重般氏(明四三法) 今回奈良區裁判所へ轉勤した。
幸崎一義氏(大一〇法) 先般朝日海上火災保險株式會社大阪支店より東京支店へ轉勤

した。
石塚大藏氏(明三九法) 今般船場警察署長を退職した。
武田左三郎氏(明三六法) 今般堺警察署長に榮轉した。

日向幸藏氏(明四二法) 今般新町警察署長に補せられた。
柏原好郎氏(大七法) 今般警視に任ぜられ港水上警察署長に補せられた。

田中又一氏(大八法) 今般柴島警察署長に任ぜられた。
林 繁氏(大七法) 今般鳳警察署長に補せられた。

植田庄太郎氏(大三法) 今般佐野警察署長に任ぜられた。
岡村順藏氏(大二三商) 去る九月二十一日福井縣遠敷郡三宅村大字日野の素封家河原茂太夫氏長女菊枝嬢ご華燭の典を舉げた。

校友住所移動

中江村治郎(明四一經) 福岡市大字島飼字後四六一番地
平川良雄(大五專經) 廣島縣沼隈郡松永町
井阪恭一(大二三經) 東區今橋三丁目鴻池ビルディング三階攝津信託株式會社

濱崎多松(大一二商) 門司市新川町三丁目三正商會
藤田和夫(大三法) 東京市日本橋區濱町二丁目一(二番地)(自宅)
京橋區木挽町五丁目四番地(事務所)

横山甚一(大四法) 兵庫縣武庫郡精道村打出字三反田
宮井幸吉(大二五專經) 大阪府豐能郡小會根村長島

泉 義三(大)四專(函) c/o Goshu Kabushiki

Kaisha, Albert Building,
Hornby Road,
Fort Bombay, India.

木下一男(大)九法 大阪市住吉區住吉町七〇七
中島繁龜(書) 講師 京都市上京區相國寺東門前
町北詰中町

服部嘉香(書) 教授 東京市外松澤村上北澤左内
町

三矢暉吉(大)二應 大阪市住吉區北田邊町四〇
七

山口直三(明)二二法 東京市外大井町寺ノ下一四
四七

中新猛夫(大)二四專法 東區今橋三丁目安田信託株
式會社

刈谷明忠(大)三專法 東區今橋三丁目安田信託株
式會社

廣實郁雄(大)一三法 豐能郡北豊島村字宮ノ前
藤田 寛(大)二五專法 兵庫縣武庫郡西灘村原田八
六ノ一原方

濱松 參(大)七應 香川縣小豆郡草壁町字下村
香取 一(大)四法 尼崎市別所村五九三の四

西山正雄(大)一三法 大阪府南河内郡狹山村西池
尻

八田義雄(大)九應 京都府相樂郡上柏町東作リ
道二

大島 勉(大)一〇應 奉天省本溪湖旭町九七
馬場次郎(大)一三法 南區高津町十番町一〇

吉川重慶(明)四三法 奈良縣磯城郡柳本町
富山忠三(大)一三應 鹿兒島市松原町一五一

山田耕助(大)一應 北區曾根崎上一丁目五五六
佐伯 弘(大)四專(函) 西宮市松原町五七

吉松俊之助(大)二四專法 西區川口町一五員島商業株
式會社大阪支店

校友改姓名

(舊) (新)

大九經 門田芳雄 柳澤芳雄
大八法 木下多景家 宇喜多多景家

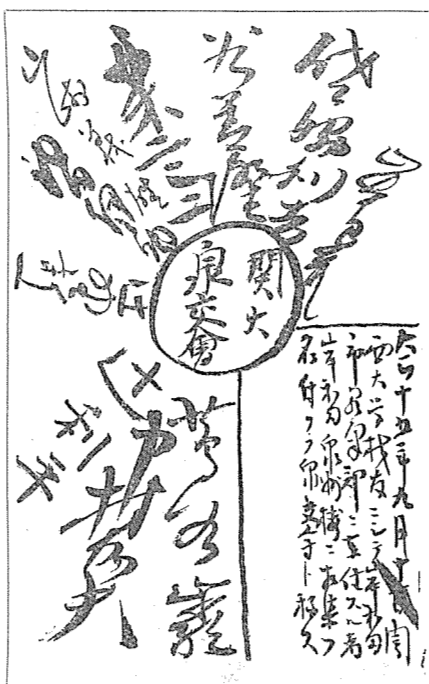
校友逝去

大正十五年九月十五日

關西甲種商業學校教諭 秋山卓爾氏

大正十年商業學科卒業

右訃音に接し謹んで弔意を表す



千里山歌壇 編輯局選

△吉野拾遺 大村 吳 樓

菁莪のはな晝ながらなる露もてり如意輪堂の裏谷
のみち

腰伸ばば疲れし我れか足曳の山の茶店の床凡のう
へに

燈籠に鶴鶴が葉をくひてなり若葉小暗き如意輪堂
の庭

星空に大木の梢を仰ぐとき痴呆て啼けりむさび
のこみ

△學 園 頌 蔭 坊 子
かぎりなく千里山阪ふみこえて學びの老はよろず
世に咲け

△杉村君を憶ふ 徳久 俊 次
此の年の夏のあつさに得も堪へて秋をも待たずち
りし病葉

死すとも死せじと云ひしその友の臨終の言葉あ
が胸を打つ

たらちれの深き御めぐみ思ひては君はあくまで生
きんと希ひぬ

今一度起つ日あらんと吾が友のノート頼みし文も

かなしき
かきまでわびし心に責められじ
會ふことなくも生きてしあらば

△人生 苦 川上まさや
にがげの滴あまます飲めと云
ふしづくの盡きて息絶えてやは

人の世は苦しきものと君の言ふ
そのことわりは知らぬにあらね

△別 後 落葉子
悲しみにこころ沈めばみづから

になぐさむすべいつか覺し
△旅 に て 霜 村 生
久々の旅にしあれば村々に實のれる枇杷の色めづ
るかな

緑こき岸邊の千茅はるるくみ海をくまざる中國の
旅

△旅より歸りて
久に來し酒場よ秋よ冷々白く光れるテーブルに
倚る

△秋 鈴木たけを
初秋の武庫川中に男めてしきりに魚をとりてぬに

けり
△病 床 東 清 一
枕邊に來たりしづかにわれを見し妹をわれも物云
はでみぬ

我病めば幼き妹弟のいさかひせぬをもさみしと思
ひぬ

△京 佐津間 秋夫
舞姫のゆうぜん小袖紅き衣繪日傘匂ふ京は繪の街
京はよし加茂川べりの青柳に靜もれて降るたそが
れの雨

△星 吉田ただなみ
青き赤き紙のきねをば召すき聞く君の御すがた今
見せてがな

△心弱き子の歌へる 吉田 凡々
夢に見し初恋の子のおもかげをだきてはかなや秋
のれざめは

自らの心の弱き知る故に世のこむわりをこむわり
としつ

覺めて後悔ゆきや我の酒飲みて人もなげなる振舞
をする

△思 出 坂本和代詩
悲しくも母さりましし思出をあらたに抱く秋とな
りけり

△感 傷 藤村まさる
午ごきの雑踏に來て食堂の乙女あはれと思ふ日も
あり

△雜 詠 新宅 生
何樂し落葉追ひつつ幼子の一葉ひろいてはほほと笑
みけり

ポプラーの枝打つ風を氣にしつつ汽車のきしりは
知らでいれけり

△別 離 珠川 俊 一
長く又短き時と思はれぬ旅立つ君と語りてあれば

△夢 川原美 佐緒
汝に夢む夢をば夢とこむわきて空しきこころ誰に
泣かまし

學生彙報

千里山野球部朝鮮遠征記錄

千里山野球部が部長岩崎教授引卒の下に八月十七日梅田驛を出發し朝鮮各地に遠征したことは既報の通りであるが、其後の報告に依るに戦績極めてよく十三戦九勝三敗一引分にて中にも對全州戰に於ては森田投手の好投に完全に打撃を封じノーヒット・ノーランの記録を残し九月七日夜部員一同無事歸阪した。戦績左の通りである。

八月十九日 對全大邱 於東雲球場 十二對零本學大勝す。審判林、金、兩氏。

Table with 2 columns: Team names (e.g., 豊林森金能河三永隆) and statistics (e.g., 35 14 4 5 3 4 3 2).

Table with 2 columns: Team names (e.g., 杉田藤内誌原) and statistics (e.g., 30 4 9 0 0 0 0 4).

八月二十一日 對龍山鐵道軍於龍山球場三對零で敗る。審判松下、上原、松島諸氏。因に龍山軍は朝鮮一の強チームである由。

Table with 2 columns: Team names (e.g., 豊林森金能河三永隆) and statistics (e.g., 29 3 1 2 0 7).

Table with 2 columns: Team names (e.g., 黒西關綱小後藤能) and statistics (e.g., 35 9 2 2 4 1).

八月二十二日 對殖産銀行 於京城球場。六對零で敗る。審判須田氏。

Table with 2 columns: Team names (e.g., 豊林森金能河三永隆) and statistics (e.g., 29 1 2 1 2 2).

Table with 2 columns: Team names (e.g., 田中谷木内田副橋村) and statistics (e.g., 37 12 5 2 0 2).

八月二十三日 對龍山二回戰 於京城球場 六對三にて再敗す。審判丸中、眞鍋、渡邊の諸氏。

Table with 2 columns: Team names (e.g., 陸金豊森永能三河林) and statistics (e.g., 31 5 3 8 2 7).

Table with 2 columns: Team names (e.g., 岡村 子西島藤井瀬) and statistics (e.g., 32 7 4 4 6 1).

八月二十四日 對京熙俱樂部 於京城球場 無勝負零對零、審判丸中、西川、安達の三氏、因に京熙軍投手高橋は今夏専門學校大會に優勝した五高の投手。

Table with 2 columns: Team names (e.g., 豊森金能永三隆河林) and statistics (e.g., 33 6 8 2 3 0).

Table with 2 columns: Team names (e.g., 兄置谷田弟橋山本木) and statistics (e.g., 27 2 9 1 0 0).

八月二十七日 對兼二浦三菱製鐵 於同球

場。二對一本學勝、審判横山、龍川兩氏。

Table with 2 columns: Team names (e.g., 豊隆森金三能永河林) and statistics (e.g., 31 6 8 3 3 4).



京城驛前に於ける千里山野球部チーム

八月二十八日 對平壤鐵道軍於平壤中學九對零本學大勝、審判松井、渡邊、下川の三氏。

Table with 2 columns: Team names (e.g., 田山田政木瀨田村) and statistics (e.g., 27 6 3 9 10 6).

Table with 2 columns: Team names (e.g., 和瀬代井田山松田原) and statistics (e.g., 31 3 4 2 2 10).

八月二十九日 對安東滿鐵俱樂部 於同球場。六對三本學勝 審判村上、安田兩氏。

Table with 2 columns: Team names (e.g., 豊隆森金三河永能林) and statistics (e.g., 29 7 1 4 4 2).

Table with 2 columns: Team names (e.g., 塚葉田橋井部流谷田) and statistics (e.g., 33 8 7 2 1 3).

九月一日 對全木浦 於木浦鐵道球場、六對二本學勝 審判井上、下條、吉原三氏。

Table with 2 columns: Team names (e.g., 豊隆森金能河永三林) and statistics (e.g., 35 7 7 6 14 2).

Table with 2 columns: Team names (e.g., 栗林濱二下木久藤中) and statistics (e.g., 34 7 7 3 0 4).

九月三日 對全木浦第二回戰 於同球場、六對零本學再勝 審判井上、下條、吉原三氏。

Table with 2 columns: Team names (e.g., 豊隆森金能河永三林) and statistics (e.g., 37 8 6 4 2 1).

Table with 2 columns: Team names (e.g., 本川條木田本村本) and statistics (e.g., 32 4 6 0 1 7).

九月四日 對全州 於全州高等普通學校、二對零本學勝 審判 溝口、徳永、宮本三氏。

Table with 2 columns: Team names (e.g., 田山田政木瀨田村) and statistics (e.g., 27 6 3 9 10 6).

Table with 2 columns: Team names (e.g., 宮橋松小柳橋田橋) and statistics (e.g., 28 0 10 0 1 6).

九月五日 對全群山 於群山中學
十六對四本學大勝 審判 馬場、上田兩氏。

(關大) 田 田山政瀨田村木
豊林森隆金能永河三
7 5 1 2 8 9 3 4 6

(群山) 岡田里井野村中本岸
花福中西河今山山山
8 3 6 2 1 9 8 4 7

1	0.363
2	0.260
3	0.216
4	0.211
5	0.184
6	0.175
7	0.120
8	0.111
9	0.090
10	0.000
11	0.000
12	0.000

尙朝鮮遠征中の個人打撃率左の如くである

關西野球聯盟秋季
リーグ戦日割決定

同志社大學、關西學院並に本學の各野球部が組織してゐる關西野球聯盟の本年度秋季リーグ戦の日割は最近左の通り決定した。

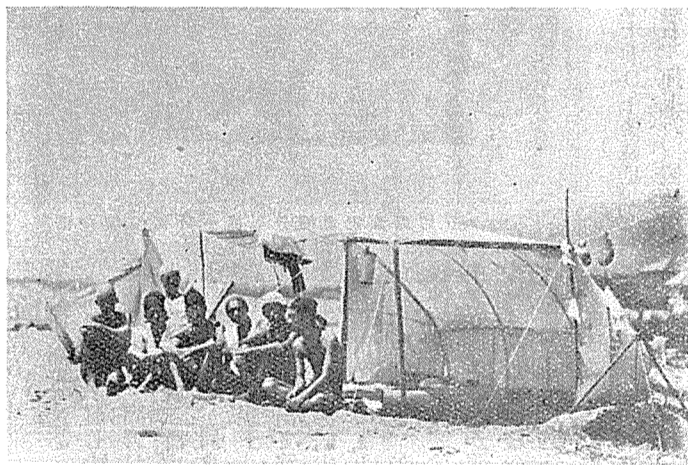
- 十一月六日 於甲子園球場 關西學院 對 同志社大學
- 十一月七日 於寢屋川球場 關西學院 對 本學
- 十一月十三日 於寢屋川球場 同志社大學 對 本學
- 十一月十四日 於寢屋川球場 同志社大學 對 關西學院
- 十一月二十日 於甲子園球場 關西學院 對 本學
- 十一月二十一日 於寢屋川球場 同志社大學 對 本學

(各日何れも午後二時より)

千里山陸上部部報

本學陸上部選手は去る八月十一日より市立運動場に於て開催されたる關西學生陸上競技聯盟主催の第六回優勝陸上競技大會に参加してその全力を盡して闘つたが時に利なく遂に京大に一籌を輸するに到つた。然もフィールドに於て京大に勝を譲りたれどもトラックに於

千里山岳部員のキャンピング(記事参照)



ては本學優勝の榮を獲得するこゝを得て萬丈の氣を吐いた。各校總得點數は次の通りである。

- 京大 一〇二點二〇分一九
- 本學 九二點四分三
- 同志社大學 五八點一〇分七
- 關西學院 四八點

山口高商 二五點二〇分九
大阪外語 二四點四分一
神戸高商 一三點
三 高 一三點
甲南高商 一二點 (以下略)
トラック優勝校—本學(六二點)フィールド優勝校—京大(三八點二〇分一九)

千里山端艇部部報

去月十六日(土曜)午後一時より本學食堂に於て部員總會を開いた。豫科二年福原菊二郎、奥村正一の兩君を副マネージャーとして迎へるについて同君の挨拶あり、その他二三の報告あり三時散會した。

因に部員一同は來る十月三日淀川に於いて大阪高工學友會主催端艇競漕大會に出場の爲、最善を盡して練習してゐる由、學友の後援を希望してゐる。(後藤マネージャー報)

千里山馬術部主催
馬術大會

千里山學友會馬術部にては去る九月二十四日早朝より大阪愛馬會後援の下に同會會場に於いて馬術大會を開催した。當日は大阪學生乘馬聯盟、京阪神及び各地の否大學高等專門學校馬術部選手出場し、障碍卷乘、戴獲團體馬場馬術等の競技あり、別に大阪愛馬會その他の高等馬術騎兵聯隊の模範馬術等あり頗る盛會であつた。

千里山山岳部報

夏季休暇中山岳部は數班に分れて各地へ旅行した、之等各班の報告を左に記する。但し回数には前號に引續く。

第三回(紀南キャンピング)世帯道具と住居

こを背負つて七月十日午後五時天保山を出帆して紀南に向つた、翌朝七時田邊に着き、先づ同所を距る一里の地點にある臺岩の險を探る、兎に角登つて其珍らしい岩山の景を賞したが扱下りる一段になつて僅か三町か四町の道を三時間程も迷ひ込んだ、後で土地の人に聞けば此處は登れば下りる事の出来ない昔から傳説のある處所だとの事で一同今更に驚嘆の目を張つた其夜は湯崎白濱温泉にキャンピングを張つた、夜明け頃から雨に降られて早朝キャンピングを巻いて熊野街道を周參見に向つたが終日の雨と道路の險にすつかり閉口した、荷物は重く日は暮れる、遂に道を迷つて十時頃日置に辿り着いて警察署の御世話で旅宿に一泊した。次の日は周參見、串本を経て潮岬で一泊、茲で一日滞在して本州最南端の大眺望を恣にした、丁度高山の頂上に達した時に感ずるさ同じ様な氣分がした、それから勝浦を経て日本一の稱ある那智の瀧、西國三十三所第一の札所那智山青岸渡寺、熊野神社に詣て新宮を経て瀧八丁の奇勝を探り本宮熊野座神社を參拜し小栗判官照手姫の古跡湯峯温泉に旅の勢を流した、茲は他の温泉場で見受ける様な淫蕩的の氣分は無く本當に靜かな山間の温泉場氣分を味ひ得る所である。かくて新宮を経て勝浦に引き返して乗船鳥羽に上陸伊勢參宮奈良を経て大軌電車で大阪に運で歸されたのは七月十九日の夕方であつた。參加者學生武内元義、藤田日出夫の二君。

第四回(十津川越熊野行)

七月七日午後一時四十分天王寺發、諸兄の御見送を受け出發、四時五條下車、自動車にて

靜かな田舎町を南走して立川渡、天辻を經七時過坂本に着、いづみやに投宿、ランプの光の下で今日の追憶と前途の愉快を語る。

第二日(八月)七時半出發、天川の溪流を右に見ながら九時辻堂に着

宇井、清水、鹽鶴、長殿等の村落を經十一時川原にて飯盒を開く、

上野地では黒木御所、竹原八郎古戰場を見た

三里越の難所を越え津越野河原で野營した。

第三日(九月)八時起床十時出發、天野原風屋より小山手に至り百姓家にて晝食す、飯時地震あり、休憩晝寢の後

五時前小森へ向ふ小森旅館泊。

第四日(十日)七時出發那知谷平谷を通り一〇七七米の玉置山により頂上社務所に一泊。

第五日(十一日)四時出發、玉置神社寶物名什を拜觀し一氣に下山して瀨に向ふ、舟で北山川を廻り和歌山奈良(右岸)三重(左岸)三縣の錯綜した處を見る。

第六日(十二日)荷船に乗つて川を下り十二時水合着、更に東宮に出て湯峯着浦地君の歡待を受く。

第七日(十三日)熊野座神社を拜しプロペラ船にて新宮に出て熊野速玉神社に詣で補陀落寺横の宿で泊る。



福島辯論部第一回部員紀念攝影

第八日(十四日)未明那智瀧から那智の觀音を拜し勝浦へ下り赤島、浦島、外湯、各温泉に連日の勞を醫しかくて琉球丸で歸阪の途についた。因に一行は各地で御世話になつた各位に深謝してゐる。

參加者學生生穴戸重雄 鳴尾芳太郎、勝田宣三の三君。

第五回(高野連峰) 八月十七日午前七時難波驛出發、高野口より徒歩午後二時山上普賢院に着、同日は山上巡拜。翌十八日早起同院を出て路を東南に取り薄崎大瀧上垣内を經て立里荒神に至り晝食、午後陣峰に向つた、途中夕立にあつたが間も無く晴れ、雨後の景を賞しながら奥院に詣で夕方歸宿した

翌十九日午後發足、大門より町石道にかかり鏡石、押上石、袈裟掛石等の名所を見ながら毎の町石に昔を偲びつ矢立つを經捷徑を天野一町村に出て官幣大社丹生都比賣神社に詣でた。同所より南行、急坂の峠を雨雲の寄らぬ間にさ走る様にして下つて妙寺に向つたが途中で大雨に逢ひ、ぶぶ漏れになつて停車場に着いたら汽車が來た處であつた、九時歸阪。

參加者講師河村信一氏、學生高橋勇、山本順應、明石輝夫、齋藤湊、坂田安治の諸君。

第六回(海濱キャンプ) 八月二十三日から九月二日迄西宮香櫛園濱に二個のキャンプを張つてキャンピングライフを初めた、附近在住の先輩同窓生が時に訪ねて下さつて單調なキャンピングライフを賑はして下さつた事を感謝する、時には六人、七人の大世帯にも成つた、同宿者は佐藤辰夫、藤田日出夫、星野の三名であつた。訪ねて下さつた人人は左の數君であつた。永井君、播磨君、武田君、馬殿君、中島君、眞砂君、神木君。

第七回(生駒西麓) 九月十二日午前七時大軌電車上六停留所出發瓢箪山下車、生駒山西麓の歴史を探つた、次に巡歴個所を列挙しよう。瓢箪山稻荷、南朝忠臣瘞骨處、往生院、梶無神社、地藏院、觀音寺多門寺跡、花岡山、玉祖神社、俊徳丸邸跡、鏡塚千塚、法藏寺、教興寺、岩谷辨天、梅岩寺、恩智神社、神宮寺、恩智左近墓、瑠璃光寺、鐸比古鐸比賣神社。柏原より乗車歸阪した。參加者講師河村信一氏、學生齋藤湊、稻垣三郎、河村信典の諸君。

第二回部員總會 去る六月第十教室に於いて開催、左の事項を決議した。

一、本年度委員任命
法三—吉川定、福田繁芳、經三—星野武二、杉本喜一、商三—宮川元之助、文三—藤本浩一、法二—上岡活道、灘龜藏、正井善三、經二—松井廣、山室繁男、商二—神戶鶴三、文二—大木原健司、法一—筒井一馬、

經一—大熊隆、西内宮司、商一—渡邊正人、文一—河野政平。

二、委員章及び部員章の選定
三、本學年度事業方針豫定の發表
第二回學内雄辯大會 六月二十日午後六時より難波元町鐵眼寺にて開催、非常の盛會であつた。當日のプログラムは次の通りである。

一、開會の辭 (委員) 星野武二
一、混沌たる現代世相に就て (商科) 野田生二
一、現代の學生思想に對する所見 (法科) 中村太輔
一、織繰される人間の考案 (文科) 今廣華綾
一、沈鐘の賦 (文科) 村手光瑛
一、社會進化の過程に就て (經濟科) 大熊隆
一、來るべき人類階級闘争の前に立ちて (法科) 筒井一馬
一、國民政治の黎明に立ちて (法科) 山口秀盛
一、十字街頭に立てる學究の悲哀 (文科) 大木原健司
一、心にかかる峯の白雪 (商科) 宮川元之助
一、西洋萬能主義に直面して (商科) 赤山一郎
一、青年の意氣 (法科) 森 吉太郎
一、經濟學究の立場より (商科) 伊場信一
一、自己内心の要求に根ざして (經濟科) 西内巨司
一、思想の展開と自由平等の關係 (經濟科) 橋本太一
一、挨拶 (辯論部長) 島田三郎 (經濟科) 板橋 悟
一、青年の自覺と社會改造 (經濟科) 板橋 悟
一、第二維新に際し青年の自覺を促す (法科) 小宮宮之助 (第二三頁へ續く)



鳴門横断のコレドーを 三つ九水木部部選手

一、本年度委員任命
法三—吉川定、福田繁芳、經三—星野武二、杉本喜一、商三—宮川元之助、文三—藤本浩一、法二—上岡活道、灘龜藏、正井善三、經二—松井廣、山室繁男、商二—神戶鶴三、文二—大木原健司、法一—筒井一馬、

經一—大熊隆、西内宮司、商一—渡邊正人、文一—河野政平。
二、委員章及び部員章の選定
三、本學年度事業方針豫定の發表
第二回學内雄辯大會 六月二十日午後六時より難波元町鐵眼寺にて開催、非常の盛會であつた。當日のプログラムは次の通りである。
一、開會の辭 (委員) 星野武二
一、混沌たる現代世相に就て (商科) 野田生二
一、現代の學生思想に對する所見 (法科) 中村太輔
一、織繰される人間の考案 (文科) 今廣華綾
一、沈鐘の賦 (文科) 村手光瑛
一、社會進化の過程に就て (經濟科) 大熊隆
一、來るべき人類階級闘争の前に立ちて (法科) 筒井一馬
一、國民政治の黎明に立ちて (法科) 山口秀盛
一、十字街頭に立てる學究の悲哀 (文科) 大木原健司
一、心にかかる峯の白雪 (商科) 宮川元之助
一、西洋萬能主義に直面して (商科) 赤山一郎
一、青年の意氣 (法科) 森 吉太郎
一、經濟學究の立場より (商科) 伊場信一
一、自己内心の要求に根ざして (經濟科) 西内巨司
一、思想の展開と自由平等の關係 (經濟科) 橋本太一
一、挨拶 (辯論部長) 島田三郎 (經濟科) 板橋 悟
一、青年の自覺と社會改造 (經濟科) 板橋 悟
一、第二維新に際し青年の自覺を促す (法科) 小宮宮之助 (第二三頁へ續く)

歐米の學界

ルドルフ・オイケン教授の訃

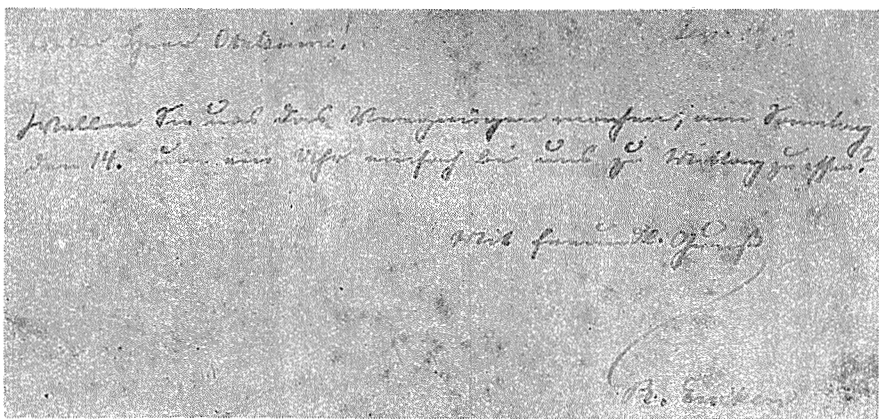
ドイツ、イエーナ大學教授、ルドルフ・オイケン、博士 (Dr. Rudolf Eucken) は、去月十五日肺炎のため逝去した(享年八十歳)。同教授の人となりには、曾てその肖像と共に本誌に掲載してこころがあるが(第八號第四頁及び第二十六頁参照)、更に左に武内、大立目兩氏を煩してこの學界の巨人を偲ぶよすがとする。

オイケン教授に就て

教授 武内省三

オイケン博士は一八四六年獨逸の小市アウリツヒ Aulich に生れた。ゲッティンゲン、ベルリン大學等で哲學を専攻し一八七四年以來クローネ・フッシャーの後を承けてイエナ大學の教授となり同大學に於て活動しておつた。が近來老齡の故を以て暫く退職しておつた。同教授は最初哲學史に興味を寄せたが後精神生活の哲學を稱へて獨り獨逸の學界のみならず英國、スカンヂナビヤ、アメリカ等にも少からぬ影響を與へた近代の大哲學者の一人である。我國にも一時ベルグソンと相並んで其思想は廣く喧傳された事がある。歐洲戰爭の勃發當時、獨逸の軍國主義を辯護したので英米の諸學者の感情を不尠害したと言ふ。近年我國を訪れられるこの噂が幾度も傳はりながら終に其實現を見ずして死去されたのは誠に痛惜の感に堪えない。

教授は現代に於ける新理想主義の運動の先驅者であつて一八八〇年頃未だ理想主義の盛でない頃から其熱心な主張者であつた。其思想は古典的な獨逸理想主義、特にフィヒテに負ふ所多く理想主義的な二元論と活動主義とが



(信書るたれらせ密に師講目立大學本) 蹟筆の授教ンケイオ

其核心をなしてある。彼の精神生活の哲學によれば現實の經驗的世界が存在の全部ではなく更に超主觀的な精神の世界がある。此の精神の世界或は精神生活こそは宇宙的な、超個

人的な根本生命である。其は自由であり又創造發展的である。然しながら此る精神生活は未完成である。

現實は決して樂觀論者の考へる様な調和でもなく善でもない。現實は實に不道德に満ちておる(二元論)故に精神生活は完全に自己自身に到達する爲、精神にあらざる物、即自然と戦ひ之を克服しなければならぬ(活動主義)。然してかかる宇宙の本質たる精神生活が實現せらるるのは人間の歴史に於てである。

博士の哲學は斯くの如く唯物論や自然主義に反對して唯心論者である。然して現實と理想との二元論の對立を認め現實の不完全を説き完全への努力を高唱したところ生き生きとした理想主義の眞面目を躍如たらしめておる。

然かも其哲學が形而上學的であつて認識論を中心としなかつた事は同じ理想主義の内にあつても又新カント學派とも異なつた點であつた。博士の哲學が斯く形而上學的であつて認識論的でなかつた事は博士の哲學が獨逸にあつて不遇な境地に居らねばならなかつた最も有力な原因であつた。又事實博士は故國では哲學者としてよりはむしろ豫言者、説教家、或は改革家等を以て目せられておつた様である。然し兎に角十九世紀の終から二十世紀の初にかけて華華しい活動をした近世の大思想家の一人であつた事は何人も異論のない點であらふ。

其著書の重なる物は次の如き物である。

- 1 Lebensanschauungen großer Denker 1890
- 2 Die Einheit des Geisteslebens im Bewusstsein und Tat der Menschheit 1888
- 3 Der Kampf um einen geistigen Leben-

- sinhalt 1896
- 4 Der Wahrheitsgehalt der Religion 1901
- 5 Grundlinien einer neuen Lebensanschauung 1907
- 6 Die Hauptprobleme der Religionsphilosophie der Gegenwart 1907
- 7 Der Sein und Wert des Lebens 1908
- 8 Erkennen und Leben 1912
- 9 Zur Sammlung der Geister 1913
- 10 Mensch und Welt 1918

オイケン先生を憶ふ

講師 大立目重虎

回顧すれば四十二年前、私はイエーナ大學に於てオイケン先生から「名大家の人生觀」を題する講義を聞いたことがある。此講義は當時非常に目新しいものとして學生に歡迎せられ、聽講者は實に百五十人の多きに達してゐた。講義の内容は五六年後に著書の形になつて出版せられ、先生は之に依つて一躍其名を擧げた云ふことも出来る。

當時先生は三十九歳で奥様は三十歳前後らしく三歳のお嬢さんがあつた。先生の風采は極めて小綺麗で而かも飾つた所にてはなく、頭髮は長くはないがあだかも一本一本に魂がこもつてゐるやうに勢よくて、先生の質朴剛健な性質を良くあらはしてゐるやうに思はれた。又教壇に立たれた時は其聲雷の如く、活潑に手を振り、拳に握り、机を叩いて全く形容の出来ぬ程の熱辯家であつた。

先生の趣味は英雄傳等歴史に關したものを讀まれること、特にプラトーン、トーマス・アキノ等の傳記を愛讀して居られたやうであつ

た。先生は當時ごちらか云へば歴史派に属する學者であつたのであらうが、後になつては新カント學派になられたやうである。

當時日本は支那と一緒に考へられ、否寧ろ支那の方がより多く知られてゐるやうな、状態であつた。斯う云ふ時代にドイツに於ける最初の日本の學生であつた私は先生より非常な好意を受け、學期毎に三回パラデス街の山手にある二階造の廣莊な邸宅に招待せられ、常に奥様方と一緒にドイツ風の睦まじい家庭生活の中にひたる事が出来た。奥様はフランス風な極めて優雅な方で先生にして此夫人ありきは一寸意外のやうにも思はれた。

私が入學してから一年半程たつて日本の友人のエーナ大學に入學し來つた者十八人に達した。斯くして異國の空で嬉しい日本の便りを語り合ふことが出来るやうになつたが、思出多い此等の人人は今も多く故人になられた。現在健在の方は公爾松方巖、岡山縣代議士有森新吉、住友銀行監査役草鹿長兎次郎の三氏のみである。

最後に私の在學中オイケン先生と共に教鞭をこつて居られた諸先生の名を参考までに挙げて見やう。當時神學博士として有名であつたハーゼ(當時八十五歳)又歴史家としてはリビシュース(當時六十五歳)宗教歴史家ニッポルド(當時六十歳)教育家として有名なライン(當時三十五六歳)又當時オイケン先生の競争者であつたりフマン(當時四十歳)ダルウエンの後繼者なるヘッケル等の諸先生が其主なる者である。

コレージュ・ド・フランスに就いて

一般にフランス大學と呼びなされてゐるコレージュ・ド・フランス Collège de France に就いては我國のみならず他の諸外國に於いても種種の誤解があるやうである。

左に譯出するのは近著イコノミック・ジャーナル (The Economic Journal No. 142 June, 1926) に於て同大學に關しジード教授が執筆せるものである。(T. M. 生)

私はかねてから「ソルボンヌ」(Sorbonne)、「コレージュ・ド・フランス」(Collège de France) の名前が外國人に依つて屢誤用せられることに意を拂つてゐるが、ここに兩者の正しい意味を陳ぶることは、讀者にこつても或ひは興味ある事柄ではないかと思ふ。

ソルボンヌとはパリ大學の建設者即ち第十三世紀の中葉に於ける僧侶であつて、且つ聖ルイ王の懺悔聽聞僧たりしロベール・ド・ソルボンヌを記念する爲めに、曾つてパリ大學が有してゐた名前である。今日、此名は同大學の半分を占むる建物、換言すれば文學部の全部及び理學部の一部に相當する部分に與へられてゐる純歴史的な敬稱となつてゐる。

コレージュ・ド・フランスはパリ大學の一構成部分ではない。此點に關しては多くの誤解があつて、例へばイコノミック・ジャーナル誌さへ其通信員一覽表中の——私は其中の一員たる光榮を有する——私の名前の後に「パリ大學」を印刷してゐる。成程、私は同大學法學部で講義してゐた間こそパリ大學職員の一員であつたが、今を去る四年以前に私はコレージュ・ド・フランスに移つたのである。コレージュ・ド・フランスは常にソルボンヌから獨立せる一機關としてのみならず、寧ろ實際には之に對抗する機關として一九三〇年にフラ

ンシス第一世が創設したものである(近く其四百年記念祭が催される筈である)。ソルボンヌが保守的且つ神學的であつて、ラテン語を唯一の發表手段としたに反し新しく建設せられた學校は自由にして非宗教的な教育の中心たらんことを目的とした。此兩機關の教育上の對立はやがて消滅したけれども、コレージュ・ド・フランスは依然其自治權を保有し現在尙一般には殆ど知られてゐないが、二三の著しい特質を以て、明かにパリ大學とは區別せられてゐる。その特質は即ち次の如きものである。

一、コレージュ・ド・フランスは何等の試験も課しない。又何等の學位も修了證書も與へない。従つて講義への出席は全く任意である。

科目には次の如きものがある。先づ最近ベルグソン氏に依つて講ぜられてゐる科目、之には一番大きい講堂が尙狹隘を告げる。又他方には極く小數の聽講者を集めてゐる非常に専門化した科目もある。更に其唯一の聽講者が何れも教授の後繼者にでもならうか云ふ人ばかりである云ふやうな科目も若干ある。

二、此學校は其教授なる爲めに大學の與へる資格を有することを要求しない。従つて教授選任に應ずる候補者はドクトルであることも要しないし、マスターであることも又バチェラー・オブ・アーツであることさへも必要としない。唯一の必要な條件は人類の知識の或る部門——望むらくは新しい部門、現に形成の過程にある科學——に於て傑出せることである。

三、講座は恒久的のものではなく、教授が死んだり辭職したりして其後を襲ふに足る有能の逸材がない時には變更せられることもある。故に缺員の生じた時は何時もでは學界の四方八方から申込んで來る候補者が門前市をなす。學校が以て理想とするところは常に適材を適所に置くこと云ふことであつて、之が爲めに人に變化が起る場合に屢講座の變化を惹起するやうになる。

四、教授の選任は終身の契約で行はれ、年齢には何等の制限がない。しかし思ふに二十一歳以下で任命される者は誰もあるまいし又定年制云ふやうなものもない。そして教授の地位には何等差等がなく、上下の別もないから老も若きも學校では全く平等の地位で相接する。

教授が老齡の爲めに凡ての仕事をなすに堪えないと感じた場合には助手を採用する。但し其助手に對して教授は自分で責任を負つて契約するのであつて學校は夫を承認する云ふ全く形式的な投票の外は一切干渉することがない。

學期は十二月に始まつて五月に終る。従つて各科目は平均して一週二時間宛、一年に約三十回の講義があることになる。即ち教授が授業の爲めに多くの時間を奪はれ過ぎる云ふ各大學に共通なる缺點は望ましくならず考へられてゐるのである。

私はコレージュ・ド・フランスが自治的である云つたが其意味は同校が大學總長——現在は著名なギリシャ學者のマーリス・クオアゼ氏——の管轄權の下にあるのではない云ふことである。管理の權限は學校が選んだ職員

の一人が握つて居つて此人は管理者なる最も
恰好の役名を附せられる。そして此人の主たる
職務は會合の時に司會者なることである
しかし此學校は文部大臣の支配下にある。講
座に缺員が生じた場合、學校は二人の候補者
を文務大臣に上申しなければならぬ、そして
最後の決定は文部大臣のなすところであつて
加之大臣は新しい講座を創設する權限及び自
分が適當と考へた人は何人でも之を任命し得
る權限を有つてゐる。

フランスに於ては中央集權的管理が極めて一
般的な通則となつてゐる結果一の大きな學問
の府が此程度の獨立を有することは以て驚異
とするに足る。餘り古いことではないが文部
大臣が或る演説の中でコレージュ・ド・フラン
スを大學の形式的組織にはめこむ爲めに種
種的手段を講ずるであらう旨を述べた。しかし
此大臣ド・モンテオ氏は既に其地位を去つて
しまつた、従つて吾人は此有名な教育機關の
上に蔽ひかぶさつてゐる脅威は將來長く具體
化しないものと看做してもよいであらう。

パリにて シャルル・ジード

レヴィー教授三度來朝

先年學賓として本學に迎へたことある印度學
の泰斗、フランス大學教授、シルヴァン・レ
ヴィ博士は今回三度來朝せられた。自然重ね
て本學を訪はれる機會あるべきことを期待す
る。因に同教授の略歴は左の通りである。

シルヴァン・レヴィ (Sylvain Lévi) 博士は、一八
六三年三月二十八日パリに生る。一八七三年から
一八八一年まで、シャルルマーニエ (Lycée
Charlemagne) 學園に、又一八八一年から一八八五年ま
でソルボール大學 (l'Ecole des Hautes-Études)

に學ぶ。

一八八二年に Licence-ès-Lettres (英米のバチエ
ラー・オウ・アーツに相當する) となり、翌八三年
には agrégé des Lettres (大學教授たり得べき資
格) となる。一八八六年にソルボール大學、言
語學科及び史學科の講師となり、次で指導教授
(directeur d'études) となる。一八八八年同學科
教學科の講師を経て指導教授となる。

一八九〇年、文學博士 (Docteur-ès-Lettres) の學
位を受け、その前年即ち一八八九年から一八九四
年までパリ大學文學科の講義を委託せらる。一八
九四年フランス大學 (Collège de France) の教授
に任命せられ、一八九七年から翌九八年まで、印
度及び日本に派遣せらる。一九〇四年、北米合衆
國セント・ルイスに開催せられた博覽會に招聘せ
られ佛國政府の命を受けて行く。

一九一三年、ロシア學術協會の招きを受けてペテ
ルブルグに行き、同國の探險家たちに依つて齎ら
された中央アジアに關する史料を調査す。一九
一八年フランス政府の命に依りパレスチナに行く
又同年北米合衆國にも派遣せらる。一九一九年、平
和會議に當り、外務大臣からユダヤ人に關する事
件の調査を委せらる。同年ストラスブルグ大學の
教授に任ぜられ、東洋學科の組織及び指導を委囑
せらる。一九二四年ソルボール大學宗教學部長に
選任せられ、翌二十五年にはアジア協會の副會長
に選ばれる。

一九二一年から翌三年までタゴール翁 (Rabindranath Tagore) の招きを受け Sanii Niketan (ベン
ガル) 大學に於て、歐洲人としての最初の講
義をなし、二二年から翌三三年にかけて、東京及
び京都帝國大學の招聘を受けて日本に停る (本學
が博士を學賓として迎へたのはこの時である——
本誌第八號記事参照)。

現に、ロンドンの王立アジア協會、北米合衆國の
アメリカ東洋協會の各名譽會員、ペテルブルグの

ロシア學術協會の外人會員、カルカッタの大學名
譽教授等を兼ねてゐる。

その著書の主なるものは左の通りであるが、この
外優秀なる多くの論文を Le Journal Asiatique,
les mémoires de la Société de Linguistique,
la Revue d'histoire des Religions 等に發表し
てゐる。

Le Théâtre Indien, 1890.

Le Théâtre Indien, 1890.
manta tradiderint, 1890.

La Doctrine du Sacrifice dans les Brâhmanas, 1898.

Le Népal, Etude historique d'un royaume
Lindou-3 vols, 1904.

Le Mahâyâna Sûtrânkâra, édité et traduit
d'après un manuscrit rapporté du Népal-1
vol-texre 1907; 1 vol-translation 1911.

Deux traités de Vasubandhu: Yimsikâ de
Trimsikâ, édité d'après un manuscrit rapporté
du Népal, 1926.

L'Inde de la Monde, 1926.

尙ほ一九一一年には、多くの弟子たちが博士の教
職二十五周年を機會として、師のために印度梵字
を以て題寄した。

千里山俳壇 朝 冷 選

豫三 鈴木たけを

朝顔の名残りなりし嵐哉

秋雨に靜かに立てる校舎哉

□ 校友 土井春綾

家の燈がほやけてさせり杜若

藪小路出でて青田の風に立つ

風に吹かるる葉裏にゐたり青蛙

山水の流るる里の青すだれ

棕櫚の木に風吹き通し明易き

しばらくは夕日に赤し青世
蟬時雨御手洗の水溢れつつ
ささやかに茄子も植えて安居哉

燈取虫燈籠の燈を暗うする
蜻蛉こまらず我門畑のゆいきれ

葛の葉にはこぼしるなり山清水
涼しきに行く水上の燈もりて

舟べりに波のこみあふ月涼し
月見山に轉居

移り住む家の葵に月涼し
越前三國にて

團扇そばに置いて游女の晝寢哉
九頭龍川畔三國港にて

夏霞昔ながらの藏のさま
獨者はうたふ

女戀し病やや癒えて苺食ふ
伸びきりし麥の黒きに夏の雨

家中に蝶の飛びきつ夏の雨
新涼の流に竹の浸しあり

新涼や無花果匂ふ朝月夜
鯖すしに二階は濱の風吹けり

山水の溢るるを前に鮮の宿
須磨に移りて

戀ひてきし海邊の道の夏の露
朝顔の枯れかけし葉や日曇る

湊川神社に楠公忌修せらる
楠茂り雨後の日ざしのけぶる哉

□ 新宅 生

虫鳴くや旅の布團に眠られず
嘖りや對山樓の堀の内

□ 桑山 丘子

蟬鳴くやよき見晴らしに上り來し
五月雨に炊煙去らぬ厨哉

張り物はつぎつぎ乾く秋日哉

追加 朝 冷

妻一夏を病むで病院に暮らす
日が暮れて米磨く庭のちちろ虫

□當季雜詠募集

□封皮の表面には必ず「千里山俳句」を朱記の事

□送稿先

兵庫縣 蘆屋局區内 深江

有田朝冷宛

(第一八頁より續く)

一、經濟學徒の叫び (經濟科) 山室茂雄

一、青年政黨の樹立を高唱す (商科) 神戸鶴三

一、我國現代世相を論じ民衆の奮起を促す (法科) 福田繁芳

一、斷頭臺に自由あり (商科) 田中久雄

一、開會の辭 (委員) 吉川定

明石遊説 六月二十七日午前十時一同梅田驛

頭に集合、記念撮影をなし發して明石に向つた。正午明石市若杉友の出迎へを受けて、直ちに明石公會堂に向つた。午後六時半準備萬端成り開會に先つて校友會明石支部の發會式あり、七時に到り開會した。當日は部員一同の熱誠と辯士の熱辯と加ふるに滿堂の聽衆をもつて頗る盛會であつた。

第四回學内雄辯大會——去る八月十五日午後六時半より市内天満市場集會場に於いて天満市場青年團後援の下に開催、猛暑の折柄にて辯士何れも熱汗の漧津瀬に浸つて獅子吼した

水泳部選手鳴

門海峡横斷

豫て鳴門海峡横斷の壯舉を企てつつあつた本學水泳部選手は去る夏期休暇を利用して見事

に斷行した。今その概報をすれば、選手一同は去る七月二十六日國津橋より乗船翌午後二時撫養着、校友安田氏の斡旋により、ますや旅館に投宿休養の上八月一日を以て決行の期を定めた。當日さなれば流石に選手一同は異常の緊張裏に準備を整へ、午前八時二十分に到るや、主將三木に續いて大石、本田、池内、佐々木、森下、鈴木の順序で出發し、物凄い渦を巧によけ、潮流を利用し、秘術を盡して力泳し九時對岸裸島に到着、一人の落伍者も見ない好成績であつた。殊に主將三木は二十八分四秒で横斷し、同海峡横斷のレコードを作つた。土地の村民達は一同の爲に心からの歡待を惜しまなかつた。選手一同はその謝恩の意味に於いて游泳會を催した後八月三日高松に向ひ祝盃をあげて散會した。

皇陵崇敬會報

同會では第十三回例會を兼ね大正十五年夏期特別旅行を催した、七月十八日午後五時大阪築港棧橋發、翌日末明多度津港着、直ちに鐵道にて四國靈場金藏寺、善通寺に詣で、次で電車にて琴平神社に至る。時雨の晴れ間を急いで下山し汽車に乗つて東に向ふ、坂出驛下車清水君の案内を煩して一行は崇徳天皇の御恨深き松山を上る、綾陵墓守長の説明を聞きながら白峯陵、白峯寺等を拜し、遠く木の丸御所跡を遠望す、此日は高松に泊り翌朝早起小作爭議に有名な伏石村を見つ鹽田の間を電車にて屋島に向ふ、山頂の屋島寺に賽し寺後を一周す、或は談古嶺より内海の美を稱し、或は相引川を望んで源平の戦を憶ふ、五劍山を左に見ながら下山、午後栗林公園を散

策し其夜九時半出發の紫丸で高濱に向つた、午前四時睡りながら上陸し、先づ勝山城に登り次で道後温泉に浴し石平寺其他を拜す、夕食には今朝三津市にて買つた魚を賞美した。「坊ちゃん」の古蹟をあみこにして二十二日紅丸で別府に行き一先旅館に落付き中食後地獄巡りをして地下の大秘密に驚愕した、翌日は觀海寺から附近名勝を訪ひ砂風呂に入りポート海を漕ぎながら一日を暮した、二十四日は別府を後にして宇佐八幡、耶馬溪に到り歴史を思ひ天然を賞した、夕門司に入り防長會員に迎えられて下關に泊る、二十五日野口、山崎兩君の案内で關門日日新聞社の歡迎を受け安徳天皇陵、赤間宮、春帆樓、引接寺、壇浦、一の宮、乃木神社、乃木將軍舊邸等を見、午食は特に舊獨逸領事館今の下關公會堂に於て饗應を受けた。かくて同夜今回旅行の解散式を舉げ各自或は秋吉に、或は九州に、或は宮島に向つて袂を分つた。尚同會では今回旅行に種種御世話になつた清水君野口君山崎君其他、陵墓官各員、關門日日新聞記者各位に厚く謝意を表してゐる。参加者は次の通りであつた。講師、河村信一氏、學生、山下喜代志、吉松須賀根、森井惣吉、奥川武郎、武田伴嗣、朝日勘一、溝邊文和、池永敏一、森井惣次、溝邊忠教の諸君。

大學學祭と各部 學生の準備

學内報に報道せる通り、本學大學祭が近く舉行されるにつき、學部豫科、専門部等各部の學生は、何れも委員を選び分擔を定めその準備に忙殺されつつある。

(第一頁より續く)

芝草伏せ、その上に花木を交へ植ゑて其境界を定め、其内は一圓の芝原とし、廣衢を交通し、花樹を分栽し、水道を引き、之を御苑と稱した。其地盤、東は寺町を限り、西は鳥丸に至り北方にて三百七十七間、南方にて三百八十五間、北は今出川から南は丸太町に至り東方にて七百五間、西方にて七百三間五分、周回二千七百七十間である。皇宮は嚴然とその北にありませう。

仙洞御所は皇宮の東南にありまして西北の大宮御所と接してゐます。面積合せて三萬二千餘坪で元の桃華坊の地でありませう。この御所は明正天皇(二二九〇—一三〇三)が御水尾上皇のために御造營あそばされたので、其後再三炎上のこゝがあり再建のこゝがあつたが安政元年(二二四)炎上の際には上皇在しませなかつたので再建し給はずに唯、外垣のみを修理あそばして現代に及んだのであります大正年度の御大禮の時、大宮宮を茲の空地御建てになつたこゝは誰も知つてゐるこゝで御座います。で仙洞御所は宮殿こそないけれどもその林泉は自然の美を具へて天下の名園と稱へられ二條離宮の雄麗・桂離宮の奇巧・修學院離宮の快暢と比較對照されてゐるのであります。で荷も「林泉史」でも研究しようと思ふ人は是非、拜觀すべきであります。大宮御所は洞仙御所の西北にあつて仙洞御所から長い廊下で相通じてゐます。安政度に鳥有に歸したのが徳川幕府で再建したものが即ち現今の御所であるを承はつてゐます。祐の井は皇宮の東北、中山家第跡にありませう。嘉永五年(二二二)九月二十二日(大陽曆十一月三日)明治天皇(二二五—二二七

二) 御降誕の御時、御産湯の井で御産室は其の西の方にあります。今参考のために碑文を記します。

祐井碑

井在皇宮長位中山氏舊第。即今上皇帝降誕之地也。嘉永六年夏。京都大旱。第内諸井皆涸。時上生而二年。尚以幼中。在御第。官因令鑿新井於此。深三丈八尺。清泉忽湧出。第内賴得蘇息者凡五十餘有人。事聞先帝大嘉。錫號曰祐井。蓋祐者上幼名也。後三年。上遷入禁内。尋承大統。於戲斯泉之出。固由皇德所致。而天降此嘉瑞者。亦豈偶然哉。抑上之初即位。首革武門專制之宿弊。誕敷維新之政。宇内民庶洽然露皇澤者。亦猶當時舉第類此井而蘇息也。其徵應之理。在今日彌驗。而先帝之錫嘉號。亦非徒爾也矣。頃日從一位中山忠能公立石於井側。欲記其事。而永傳不朽焉。徵文正直。正直敬記。所聞如レ此云。

明治十年七月

京都府知事從五位橫邨正直撰

京都府四等屬中村勤謹書

中山家の跡は巡查派出所の東に鐵柵がめぐらしてありますから直わかります。梅・松・竹・櫻などから芭蕉・梧桐・茶山花・菊などのさまざまな樹木があつて春夏秋冬の別なしに幽邃美々森嚴美々で尊く見えます。

皇宮の東北隅即中山家跡の西南位に猿が辻があります。皇宮の鬼門で今もなほ白線壁の上に猿の木像があります。茲の少し南に有栖川宮様の御殿がありましたそうです。なほこの猿辻は維新前に三條公なき共活躍され

た姉小路公知卿(二四九九—二五三三)の遭難地として名高いことは誰も知つてゐるにすぎません。桂宮は今出川御門の内、舊近衛家跡と略ぼ相對してゐます。づつみ南の宗像神社は内匠寮出張所の東にある。白雲神社はその東北にあり西園寺家の跡であります。凝華洞の址は建禮門の南、大銀杏樹のあるところで、御西院天皇(三二五)の仙院の舊地である。後に御花畑といひ維新前に京都守護職たりし會津侯松平容保(二四九五—二五五三)が茲に詰め居られたので例の元治元年(二五二四)七月十九日、長州兵の一隊が蛤御門・堺町御門から茲を目前に突進せんとして所謂「蛤御門の變」なるものを起したところでありました。舊九條家・近衛家の林泉は其舊を存して觀を改めず。九條家跡は堺町御門の西で御庭の林泉

は今も昔のままでその錦流亭の如きは御苑中の一景である。車返しの櫻は中立賣御門内にある。後水尾天皇(二七二—二七八)御愛の花で幹太く苔蒸して花の八重なのが著名である。高倉橋の北にある紅梅は後光嚴天皇(二〇二—二〇三)の御愛木であるといふ歌枕にある縣井は一條にある、一條家の跡で古歌に詠せしところである。井筒の石に深く彫りたる文字があるから誰にでも直わかる。此外某宮の地、某卿の邸なきいたる處にそのあきを留めて居る。近年益保存修理の道が立てられて、梅林には數千の梅樹を植ゑ、その他青松・桃・櫻花・雜樹にいたるまで、或は區を分ち或は柯を交へ、年年増殖されて、朝夕の觀、四時の興盡ぐるきなく、獨り御國の人ばかりでなく遠く外邦萬里の客さへ共に來りて偕に樂むところであります。

The Kansai University Bulletin

Published Monthly By

The Kansai University Press

No. 43

September, 1926

LEADING FEATURES OF CONTENTS

- Historical Development of the Concept of Philosophy (Begriff der Philosophie) .. Continued.. Prof. S. Takeuchi.
- Short history of the Imperial Palace in Kyoto Mr. T. Shinmachi.
- University News—Obituary—Moon-seeing Party—Annual Festival—Short List of Works by the Professors—News of 2nd Commercial School Attached—News of Kansai Commercial School Attached.
- News from Abroad—The Third Visit to Japan of Prof. Sylvain Lévi—Death of Prof. Rudolf Eucken—Collège de France.
- Alumni News.
- Students Activities.
- Miscellanea.
- Illustrations—Students' Club just Completed—Graduating Class of the 2nd Commercial School at Miyajima—Mr. G. Omura, Alumnus—Mr. Y. Kashiwara, Alumnus—Camping of the Mounteneering Party—The Members of the Oratorical Society—Mr. Miki, Record-holder in Crossing Naruto Channel—Baseball team at Seoul station—Autograph of the late Prof. R. Eucken.

校友諸氏に告ぐ

大正十五年度本學校友會會員名簿作成の都合有之候につき各位の現住所勤務先等に御變動有之候はば本月中旬に左記宛御一報相煩し度此段御願申上候

大正十五年十月

大阪市上福島關西大學内

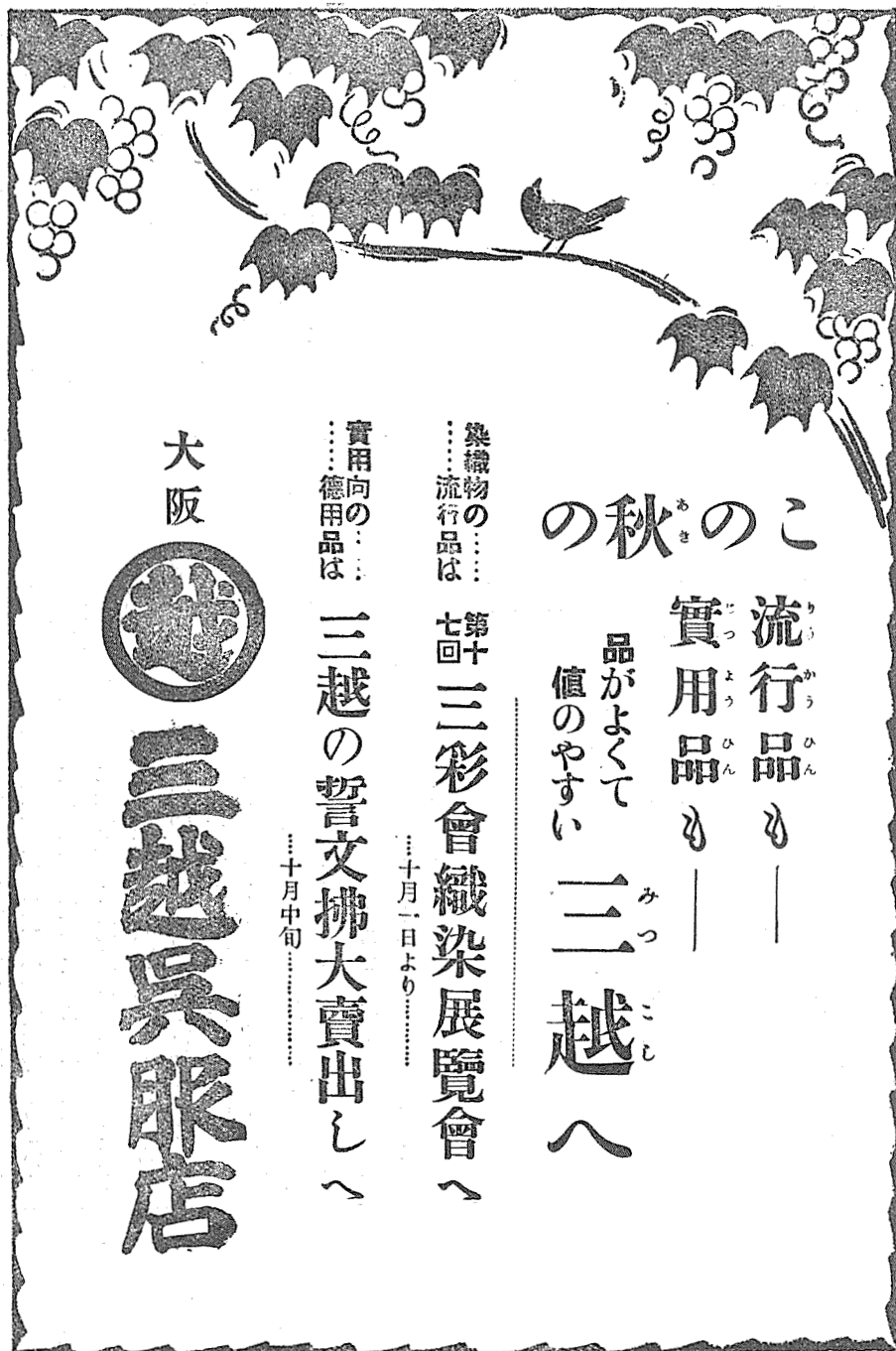
關西大學校友會

大正十五年十月十三日印刷
大正十五年十月十五日發行

不許複製

編輯兼發行人 辰巳經世
大阪此花區上福島北二丁目 關西大學學報局
印刷者 飯田彌之助
大阪此花區土佐堀通四丁目五番地
印刷所 株式會社 三有社
大阪此花區上福島北二丁目 關西大學學報局


福島學舎 關西大學
大正市此花區上福島
電話土佐堀(一〇四九) 電話土佐堀(一五七〇)
大正市外千里山 關西大學
電話吹田(一一二三)



の秋あきのこ
 流行品りゅうこうひんも
 實用品じつようひんも
 品ひんがよくて
 値ねのやすい
 三越みつこしへ

染織物の...
 流行品は...
 第十回三彩會織染展覽會へ
 ...十月一日より...

實用向の...
 徳用品は...
 三越の誓文拂大賣出しへ
 ...十月中旬...

大阪

 三越呉服店

運動場竣工

拜啓益御健勝奉慶賀候
陳ば本學千里山大運動
場の竣工を機とし来る
二十三、四日の兩日に亘
り下記の通り「大學祭」舉
行仕候間何卒御家族御
同伴御來學被成下度此
段御案内申上候 敬具
大正十五年十月十五日

關西大學

校友各位

追伸

一、新京阪鐵道株式會社の好意に依り同線天六、大學前間の半額券を發行致呉れられ候筈に相成居候
一、新京阪電車天六起點に本學受附(午前九時より午後一時まで)を特設致置候間下の割引券を御示しの上前記の御便宜取計方に就き御申出相成度候

「大學祭」舉行

關西大學「大學祭」行事概要

期日 十月二十三、四日
場所 千里山關西大學

第一日 十月二十三日(土曜日)

一、式典 午後一時

1 創立四十周年記念式

2 昇格記念式

二、學術講演會 午後二時

開會ノ辭 教授宮島綱男

琉球ニ於ケル 講師田邊信太郎

土地共有制度 教授小泉幸治

大學祭ノ報恩主義 學長松本丞治

三、音樂會 午後二時

大學學生音樂部演奏

四、展覽會 午前九時

1 本學千里山學會ノ圖書類陳列

2 本學學生皇陵崇敬會ノ出品陳列

3 本學學生運動部ノ優勝章陳列

4 本學學生廣告研究會ノポスター陳列

5 本學蒐集趣味會ノ出品陳列

6 本學學生馬術部及射擊部ノ出品陳列

7 本學學生短歌會ノ出品陳列

8 本學學生山岳部ノ出品陳列

9 本學學生フランス研究會ノ出品陳列

10 本學學生映畫研究會ノ出品陳列

11 本學學生端艇部ノ出品陳列

12 國際聯盟協會本學學生支部ノ出品陳列

第二日 十月二十四日(日曜日)

一、式典 午前九時

運動場開場式

二、展覽會 前日ノ通

三、運動競技大會 午前九時 不論晴雨

運動競技種目及順次別項ノ通

運動競技種目及順次

順次	種目
1	百 米 競 走
2	鐵 競 走
3	ス ペ リ ン グ 競 走
4	千 五 百 米 競 走
5	二 人 三 脚 競 走
6	百 米 競 走
7	盲 啞 競 走
8	四 百 米 競 走
9	走 幅 跳
10	中 等 學 校 八 百 米 リ レ ー 競 走
11	專 門 學 校 千 六 百 米 リ レ ー 競 走
12	四 百 米 投 擲
13	走 高 跳
14	パ ン 喰 競 走
15	千 五 百 米 競 走
16	百 足 競 走
17	假 裝 行 列
18	鐵 米 競 走
19	鐵 彈 爭

20	パ ン 喰 競 走
21	千 五 百 米 競 走
22	圓 盤 投
23	走 幅 跳
24	二 人 三 脚 跳
25	走 高 跳
26	ス ペ リ ン グ 競 走
27	百 米 競 走
28	パ ン 喰 競 走
29	盲 啞 競 走
30	學 友 會 各 部 對 抗 競 走
31	百 足 競 走
32	中 等 學 校 決 勝 競 走
33	專 門 學 校 決 勝 競 走
34	來 賓 員 競 走
35	八 百 米 リ レ ー 競 走
36	槍 投

プログラムは當日差上げ申すべく候

關西大學「大學祭」

新京阪電車割引券

關西大學學報局